

カシチョフの七共産主義と その世界史的教訓

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す（九）

外文出版社

北京

フルシチョフのエセ共産主義と

その世界史的教訓

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す（九）

『人民日報』編集部

『紅旗』誌編集部

（1964年7月14日）

外文出版社

北京

目次

社会主義社会とプロレタリアート独裁.....	七
ソ連には敵対階級と階級闘争が存在している.....	一九
ソ連の特権階級とフルシチョフ修正主義集団.....	三〇
いわゆる「全人民の国家」を反ばくする.....	四一
いわゆる「全人民の党」を反ばくする.....	五三
フルシチョフのエセ共産主義.....	六〇
プロレタリアート独裁の歴史的教訓.....	七二

フルシチョフのエセ共産主義と

その世界史的教訓

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す（九）

『人民日報』編集部

『紅旗』誌編集部

（一九六四年七月十四日）

プロレタリア革命とプロレタリアート独裁の学説は、マルクス・レーニン主義の真髄である。革命を堅持するか、それとも革命に反対するか、プロレタリアート独裁を堅持するか、それともプロレタリアート独裁に反対するかは、これまでマルクス・レーニン主義とすべての修正主義との闘争の焦点であったが、いまもやはり全世界のマルクス・レーニン主義者とフルシチョフ修正主義集団との闘争の焦点となっている。

ソ連共産党第二十二回大会で、フルシチョフ修正主義集団は、かれらのいわゆる「平和共存」、「平和競争」、「平和移行」という、革命に反対する理論を体系化したばかりでなく、ソ連ではもはやプロレタリアート独裁の必要がなくなったと宣言し、いわゆる「全人民の国家」、

「全人民の党」という謬論をもちだして、かれらの修正主義的体系をつくりあげた。

フルシチョフ修正主義集団がソ連共産党第二十二回大会でもちだしたソ連共産党綱領は、エセ共産主義の綱領であり、プロレタリア革命に反対し、プロレタリアート独裁とプロレタリア政党を解消する修正主義的綱領である。

フルシチョフ修正主義集団は、いわゆる「全人民の国家」というかくれみのもとでプロレタリアート独裁を解消し、いわゆる「全人民の党」というかくれみのもとでソ連共産党のプロレタリア的性格を変え、いわゆる「共産主義の全面的な建設」というかくれみのもとで資本主義の復活に道をひらいた。

中国共産党中央委員会は一九六三年六月十四日の『国際共産主義運動の総路線についての提案』のなかで、「全人民の国家」をプロレタリアート独裁の国家にとつてかわらせ、「全人民の党」をプロレタリアートの前衛党にとつてかわらせることは、理論的にはひじょうにデタラメであり、実践的にはきわめて有害である、と指摘しておいた。これは歴史の大逆転である。これでは、共産主義への移行などまったく問題にならず、ただ資本主義の復活のためにお先棒をかつぎうるにすぎない。

ソ連共産党中央委員会の公開書簡とソ連の新聞・雑誌は、むりやりなこじつけで自分のために

弁解し、「全人民の国家」と「全人民の党」にたいするわれわれの批判は「マルクス主義の断定からかけはなれた」ものだとか、「ソ連人民の実生活から離れた」ものだとか、かれらを「うるへ引きもど」そうとするものだ、などと非難している。

よろしい。それなら、マルクス・レーニン主義からかけはなれているのはいったい誰なのか、ソ連の実生活はいったいどういう状態なのか、ソ連をうしろへ引きもどそうとしているのはいったい誰なのか、われわれはつきにこの点を見てみることにしよう。

社会主義社会とプロレタリアート独裁

社会主義社会をどのように認識するか。社会主義の全段階を通じて、いったい階級と階級闘争が存在するのが存在しないのか。いったいプロレタリアート独裁を堅持して、社会主義革命をさいごまでやりぬくべきなのか、それともプロレタリアート独裁を解消して、資本主義の復活に道をひらくべきなのか。こうした問題にたいしては、マルクス・レーニン主義の基本原理とプロレタリアート独裁の歴史的経験にもとづいて、正しい回答をあたえなければならぬ。

社会主義社会が資本主義社会にとってかわるといふこと、これは人類社会の発展史上における

大きな飛躍である。社会主義社会は階級社会から無階級の社会へ移行する重要な歴史的時期である。人類は社会主義社会をとって、共産主義社会へはいる。

社会主義社会制度は資本主義社会制度にくらべて比較にならないほど大きな強味をもっている。社会主義社会では、プロレタリアート独裁がブルジョアジー独裁にとつてかわり、生産手段の共有制が生産手段の私有制にとつてかわる。プロレタリアートは、抑圧され搾取される階級から支配階級にかわり、勤労人民の社会的地位には根本的な変化が生じる。プロレタリアート独裁の国家は、広はんな勤労人民にたいして資本主義社会にはありえないもつとも広はんな民主主義を实行し、少数の搾取者にたいしてだけ独裁をおこなう。工業の国有化と農業の集団化は、社会生産力の大きな発展のために洋々たる前途をきりひらき、旧社会の匹敵しえないようなテンポで社会生産力が発展できるように保証している。

だが、ここで見ておかねばならないのは、社会主義社会が資本主義社会から生まれだた社会であり、共産主義社会の低い段階だということである。それはまだ、経済その他の分野ですつかり成熟しきつた共産主義社会ではない。それはどうしても資本主義社会からの痕跡をとどめる。マルクスは社会主義社会にふれて、「ここで問題にしているのは、それ自身の基礎のうえに発展した共産主義社会ではなくて、反対に、資本主義社会から生まれたばかりの共産主義社会である。

だから、この共産主義社会には、あらゆる点で、経済的にも道徳的にも精神的にも、この社会がでてきた母胎である旧社会の母斑がまだくつついている」①とのべている。レーニンも、共産主義の第一段階である社会主義社会では、「共産主義はまだ、経済的に完全に成熟したもの、資本主義の伝統や痕跡から完全に自由なものではありえない」②と指摘している。

社会主義社会では、やはり労働者と農民のあいだ、都市と農村のあいだの差異が存在し、肉体労働と頭脳労働のあいだの差異が存在し、ブルジョアの権利がまだ完全にはなくされておらず、「消費手段を『労働に応じて』（必要に応じてでなしに）分配するという、なお存在する不公正な現象をただちに廃絶することはできず」③、したがって、まだ豊かさの程度の差異が存在する。以上のような差異と現象をなくし、ブルジョアの権利をなくすには、ただ漸次にやりうるだけであつて、どうしてもひじょうに長い期間を経なければならぬ。それはちょうどマルクスが語っているように、これらの差異がなくなり、ブルジョアの権利が完全になくなるのでなければ、各人はその能力に応じて働き、その必要に応じて分配をうける、完全な共産主義を實現することができない。

マルクス・レーニン主義がわれわれにおしえ、またソ連、中国その他の社会主義諸国の実践がわれわれにおしえているように、社会主義社会は長い長い歴史的段階である。この歴史的段階を

通じて、ブルジョアジーとプロレタリアートの階級闘争がつらぬき、資本主義と社会主義という二つの道の「誰が誰に勝つか」の問題が存在し、資本主義の復活の危険が存在する。

中国共産党中央委員会は一九六三年六月十四日の『国際共産主義運動の総路線についての提案』のなかで、つぎのようにのべていた。「プロレタリアートが権力をかちとつたあとも、ひじようにながら歴史の時期にわたって階級闘争が継続することは、依然として人びとの意志で左右することのできない客観的な法則である。ただ、階級闘争の形態がプロレタリアートの権力獲得まゝと異なるにすぎない。

十月革命のあと、レーニンはいくどもつぎのように指摘した。

一、打倒された搾取者は、つねにあらゆる手をつくして、奪いとられたかれらの『天国』をとりもどそうとする。

二、小ブルジョアジーの自然発生的な勢力はたえず新しい資本主義分子をうみ出す。

三、ブルジョアジーの影響と、小ブルジョアジーの自然発生的な勢力の包囲と腐食の作用によって、労働者階級の隊列のなかや国家機構の職員の内にも墮落変質した分子や新しいブルジョア分子が生まれうる。

四、国際資本主義の包囲と帝国主義による武力干渉の脅威、平和的な瓦解の陰謀活動が、社会

主義国のなかで階級闘争のひきつづき存在する外的条件である。

レーニンの以上の断定の正しきは、実際の生活がこれを証明している」と。

社会主義社会では、打倒されたブルジョアジーやその他の反动階級がかなり長いあいだまだ勢力をもっており、ある面ではまだかなり強大である。かれらは国際ブルジョアジーと網の目のようになつながらをもっている。かれらは自己の失敗にこりず、あくまでプロレタリアートと力くらべをつづけようとする。かれらは各分野でプロレタリアートとかくれた闘争、または公然とした闘争をおこなう。かれらはつねに社会主義、ソビエト、共産党、マルクス・レーニン主義等々を擁護する看板をかかげて、社会主義を破壊し資本主義を復活させる活動をすすめる。政治の面では、かれらは、プロレタリアートに対抗する勢力として長いあいだ存在し、たえずプロレタリアート独裁をくつがえそうとくわだてる。かれらは、国家機関、社会団体、経済、文化・教育などの諸部門にもぐりこんで、プロレタリアートの指導権にさからい、これをのつとろうとする。経済の面では、かれらはさまざまの形で社会主義の全人民的所有制と集団的所有制を破壊し、資本主義勢力を発展させる。思想と文化・教育の面では、かれらはブルジョアジートの世界観でプロレタリアートの世界観に対抗し、ブルジョア思想でプロレタリアートその他の勤労人民をむしばむ。

農業集團化の実現は、単独経営の農民を集團経営の農民にかえ、農民の徹底的な改造のために有利な条件を提供する。だが、集團的所有制が全人民的所有制にまで高まらないうちは、また、私有経済の残りかすがまだすっきりなくならないうちは、農民はどうしても小生産者に固有なくつかの特徴をとどめる。こうした状態のもとでは、どうしても自然発生的な資本主義傾向が存在し、新しい富農をうみ出す温床が存在し、やはり農民の両極への分化がおこりうる。

以上のようなブルジョアリーの活動と、政治、経済、思想、文化・教育など各分野におけるその腐食作用のために、都市と農村の小規模生産に自然発生的な資本主義傾向があるために、また、ブルジョアの権利と旧社会の習慣の力の影響が完全には一掃されていないために、労働者階級の隊列や党機関と政府機関のなかには、やはりたえず墮落変質分子が生まれ、全人民的所有制の国営企業のなかにも、やはりたえず新しいブルジョア分子と汚職・窃盗分子が生まれ、文化・教育部門や知識界のなかにも、やはりたえず新しいブルジョア知識人が生まれ出る可能性がある。これらの新しいブルジョア分子と墮落変質分子は、すでに打倒されたとはいえ、まだ完全に消滅されていない旧ブルジョア分子その他の搾取階級分子とむすびついて、社会主義に攻撃をくわえてくる。なかでも、指導機関に巣くっている墮落変質分子は、末端組織のなかのブルジョア分子を支持し、かばいまもるので、その危険性はとくに大きい。

帝国主義が存在する条件のもとでは、社会主義国のプロレタリアートは、国内のブルジョアリーとたたかわなければならぬだけでなく、国際帝国主義ともたたかわなければならぬ。帝国主義は社会主義国にたいして武力干渉にのり出し、平和的な瓦解をおこなおうと、いつも機会をうかがっている。かれらは、社会主義国をほろぼすか、あるいは社会主義国を資本主義国に変質させようとしきりにねらっている。国際間の階級闘争は、どうしても社会主義国の内部に反映することになる。

レーニンは、「資本主義から共産主義への移行は、歴史的な一時代である。この時代が終わらないあいだは、搾取者には必然的に復活の望みが残されており、この望みは復活の行動に転化する」④とのべている。レーニンはまた、「階級をなくすことは、長期にわたる、困難な、ねばり強い階級闘争によつてなされることである。ブルジョアリーの権力が倒されたあとでも、ブルジョア国家が破壊されたあとでも、プロレタリアート独裁が樹立されたあとでも、(旧社会主義と旧社会民主党的の俗物どもが考えているように)階級闘争はなくなりはない。それは、その形態を変えるだけで、多くの点でかえっていつそう激しくなる」⑤とのべている。

社会主義の全段階を通じて、政治、経済、思想、文化・教育の各分野におけるプロレタリアートとブルジョアリーのあいだの階級闘争は、やむことがない。この闘争は、長期にわたつてくり

かえしおこなわれる、まがりくねった、複雑なたたかいである。この闘争は波のうねりのように起伏しながら、ときには比較的おだやかになり、ときにはひじょうにはげしくなる。これは、社会主義社会の運命を決定する闘争である。この長期にわたる闘争は、社会主義社会が共産主義にむかうか、それとも資本主義を復活させるかを決定する。

社会主義社会の階級闘争は、どうしても共産党の内部に反映しないわけにゆかない。ブルジョアジーと国際帝国主義は、社会主義国を資本主義国に墮落変質させるには、なによりもまず、共産党を修正主義の党に墮落変質させなければならないことを知っている。新しいブルジョア分子とふるいブルジョア分子、新しい富農とふるい富農、それに種々さまざまな墮落変質分子——これらのものはすべて修正主義の社会的基礎であり、かれらはあらゆる手をうって、共産党のなかに自分たちの代理人をさがしだす。ブルジョアジーの影響があることが修正主義の国内的根源であり、帝国主義の圧力に屈服することが修正主義の国外的根源である。社会主義の全段階を通じて、社会主義国の共産党のなかには、どうしてもマルクス・レーニン主義とさまざまな日和見主義、おもに修正主義との闘争が存在する。こうした修正主義は、階級と階級闘争を否定するという名目で、ブルジョアジーの側に立つてプロレタリアートを攻撃し、プロレタリアート独裁をブルジョアジー独裁に変えようとするのがその特徴である。

マルクス主義の創始者は、国際労働運動の経験にもとづき、階級闘争の客観的な法則にもとづいて、資本主義から共産主義への移行、階級社会から無階級社会への移行は、プロレタリアート独裁にたよらなければならず、ほかには道がない、と指摘している。

マルクスは、「階級闘争は必然的にプロレタリアート独裁に通じる」⑥とのべている。マルクスはまた、「資本主義社会と共産主義社会とのあいだには、前者から後者への革命的な転化の時期がある。この時期に照応して、また政治上の過渡期がある。この過渡期の国家は、プロレタリアートの革命的独裁でしかありえない」⑦とのべている。

社会主義社会の発展は連続革命の過程である。マルクスは革命的な社会主義を説明したさい、「この社会主義は、連続革命を宣言し、プロレタリアートの階級的独裁を実現し、この独裁を必ず経なければならない移行の段階として、階級の差異を根本的に一掃し、これらの差異を生むいっさいの生産関係を一掃し、これらの生産関係に適應するいっさいの社会関係を一掃し、これらの社会関係から生まれるいっさいの觀念を変えることをめざすものである」⑧とのべている。

レーニンは第二インターナショナルの日和見主義とたたかっただけで、プロレタリアート独裁に對してのマルクスの学説を創造的に解明し、発展させた。レーニンは、「プロレタリアート独裁は、階級闘争の終了ではなくて、新しい形でのその継続である。プロレタリアート独裁は、勝利

をしめて、その手に権力をにぎったプロレタリアートが、打ちまかさればしたが、絶滅されては
おらず、消えてなくなっておらず、その反抗をやめていないブルジョアジー、その反抗をつよめ
たブルジョアジーにたいしておこなう階級闘争である」^⑨と指摘している。レーニンはまた、
「プロレタリアート独裁は、旧社会の諸勢力と伝統にたいするプロレタリアートの頑強な闘争で
あつて、流血のものもそうでないものも、暴力的なものも平和的なものも、軍事的なものも経済
的なものも、教育的なものも行政的なものもある」^⑩とのべている。

毛沢東同志は、『人民内部の矛盾を正しく処理する問題について』という有名な著作やその他
の著作のなかで、マルクス・レーニン主義の基本原則とプロレタリアート独裁の歴史的経験にも
とづいて、社会主義社会における階級と階級闘争を全面的、系統的に分析し、プロレタリアート
独裁についてのマルクス・レーニン主義の学説を創造的に発展させた。

毛沢東同志は、唯物弁証法の観点から出発して、社会主義社会の客観的な法則を考察した。毛
沢東同志が指摘しているように、矛盾の統一と闘争というこの自然界と人類社会の普遍的な法則
は、社会主義社会にも同じように適用される。社会主義社会では、生産手段の所有制の社会主義
的改造をなしとげたあとも、階級矛盾はやはり存在し、階級闘争は決してなくならない。社会主
義の全段階を通じて、社会主義と資本主義というこの二つの道の闘争がつらぬいている。社会主

義の建設を保証し、資本主義の復活をくいとめるには、政治戦線、経済戦線、思想・文化戦線で
社会主義革命をさいごまでやりぬかなければならない。社会主義の完全な勝利は、一代や二代の
人間で解決できるものではなく、五代、十代、さらにはもつと長い期間をかけて、はじめて完全
に解決することができるのである。

毛沢東同志はまた、社会主義社会の社会的矛盾は、人民内部の矛盾と敵味方の矛盾という二種
類の矛盾にわかれており、人民内部の矛盾はたくさんあると、とくに指摘している。性質のちが
う二種類の矛盾をはつきり区別し、これをちがった方法で正しく処理するのでなければ、全国の
人口の九〇パーセント以上をしめる人民を結集して、人口のわずか数パーセントにすぎぬ敵にう
ち勝ち、プロレタリアート独裁をうちかためることはできない。

プロレタリアート独裁は、社会主義を強固にし発展させる基本的な保証であり、プロレタリア
ートが二つの道の闘争でブルジョアジーにうち勝ち、社会主義の勝利をかちとる基本的な保証で
ある。

17
プロレタリアートは、全人類を解放しなければ、自己を最終的に解放することができない。プ
ロレタリアート独裁の歴史的任務には、国内的な面と国際的な面の二つの面がふくまれている。
国内的な面での任務はおもに、いつさいの搾取階級を完全に一掃し、社会主義経済を高度に発展

させ、人民大衆の共産主義的な自覚をたかめ、全人民的所有制と集団的所有制のあいだ、労働者と農民のあいだ、都市と農村のあいだ、頭脳労働と肉体労働のあいだの差異を取りのぞき、階級の発生と資本主義復活のどのような可能性をも根たやしにし、「各人はその能力に応じて働き、その必要に応じて分配をうける」という共産主義社会を実現するために条件をととのえることである。国際的な面での任務はおもに、各国人民が帝国主義、資本主義、搾取制度に終止符を打つまで、国際帝国主義の侵略と襲撃（武力干渉や平和的な瓦解をふくむ）を防止し、世界革命を支援することである。この二つの面での任務がなしとげられ、完全な共産主義社会にはいるまでは、プロレタリアート独裁がせつたいに必要である。

当面の実際状況からみれば、すべての社会主義国はまだまだプロレタリアート独裁の任務をなしとげてはいない。どの社会主義国にも、例外なく階級と階級闘争が存在し、社会主義と資本主義という二つの道の闘争が存在し、社会主義革命をさいごまでやりぬく問題がなお存在し、資本主義の復活を防止する問題がなお存在している。どの社会主義国も、全人民的所有制と集団的所有制の差異、労働者と農民の差異、都市と農村の差異、頭脳労働と肉体労働の差異を取りのぞき、いっさいの階級と階級の差異を一掃し、また「各人はその能力に応じて働き、その必要に応じて分配をうける」という共産主義社会までには、まだまだ大きな距離がある。したがって、す

べての社会主義国はみなプロレタリアート独裁を堅持しなければならない。

こうした状況のもとで、フルシチョフ修正主義集団がプロレタリアート独裁を解消するということ、これは社会主義と共産主義にたいする裏切りにはかならない。

ソ連には敵対階級と階級闘争が存在している

フルシチョフ修正主義集団がソ連におけるプロレタリアート独裁の解消を宣言したおもな根拠は、かれらの論法によると、ソ連ではすでに敵対階級が一掃され、階級闘争がなくなったということにはかならない。

では、ソ連はいったいどのような実情にあるのだろうか。いったい、敵対階級と階級闘争はあるのかないのか。

偉大な十月社会主義革命の勝利ののち、ソ連では、プロレタリアート独裁がうちたてられた。

そして、工業の国有化と農業集団化の結果、資本主義的私有制がうちこわされ、社会主義の全人民的所有制と集団的所有制がうちたてられるとともに、数十年にわたる社会主義建設のなかで偉大な成果がおさめられた。これは、ソ連共産党とソ連人民がレーニンとスターリンの指導のもと

でかちとつた、消しきることのできぬ大きな歴史的意義をもつ勝利である。

だが、ソ連には、工業の国有化と農業の集団化がなしとげられたあとも、すでにくつがえされたとはいえ、まだ完全には消滅されていないふるいブルジョアジーやその他の搾取階級がやはり存在している。ブルジョアジーの政治的影響と思想的影響がやはり存在している。都市と農村における自然発生的な資本主義勢力がやはり存在している。新しいブルジョア分子と富農分子がまだたえず生まれている。ひさしい以前から、政治、経済、思想の領域で、プロレタリアートとブルジョアジーのあいだの階級闘争、社会主義と資本主義というこの二つの道の闘争は、ずっとつづいている。

ソ連は社会主義を建設した最初の、当時ただひとつの国であったので、参考にする他のどの国の経験もなかった。また、社会主義社会における階級闘争の法則を認識するうえでは、マルクス・レーニン主義の弁証法から離れたところがあった。こうしたことのために、ソ連で農業集団化が基本的になしとげられたあと、スターリンは早まって、ソ連には「もはや互いに敵対する階級は存在せず」⑩「階級衝突は存在しない」⑪と宣言し、社会主義社会内部の統一性を一面的に強調して、その矛盾を軽視した。スターリンは、労働者階級と広はんな大衆に依拠して資本主義勢力に反対する闘争をおこなうのではなく、資本主義復活の可能性の問題をただ国際帝国主義の

武力攻撃とつながりのある問題にすぎないとみなしていた。これは、理論的にも、実践的にも、正しくないものである。だが、それにもかかわらず、スターリンはやはり偉大なマルクス・レーニン主義者であった。かれはソ連の党と国家を指導していたあいだ、プロレタリアート独裁と社会主義の方向を堅持し、マルクス・レーニン主義の路線を実行し、ソ連が社会主義の道にそって勝利のうちに前進できるように保証したのであった。

フルシチョフは、ソ連の党と国家の指導権をにぎったあと、一連の修正主義的政策をおしすすめ、資本主義勢力の発展をいやがうえにも助長して、プロレタリアートとブルジョアジーの階級闘争、社会主義と資本主義というこの二つの道の闘争をソ連でふたたび先鋭化させた。

ソ連の社会には、多くのふるい搾取階級分子がいるばかりでなく、新しいブルジョア分子がたくさん生まれており、階級分化がますますはげしくなっているということ——人びとはここ数年らしいソ連の新聞・雑誌の報道をちよつとひろつてみただけでも、このことを説明する多くの実例を見てとることができる。

われわれはまず、ソ連の全人民的所有制の企業に巣くう各種各様のブルジョア分子の活動を見つめることにしよう。

いちぶの工場の指導者とその仲間は、職権を利用して、国营工場の設備や資材をつかい、「ヤ

ミ工場」をつくつて、品物をこっそりと生産し、ヤミ取引をし、不当な分け前をとつて、暴利をむさばっている。たとえばつぎのような実例がある。

レニングラードのある軍需品工場の指導者は、自分の腹心を工場の「あらゆる重要なポスト」につけて、「国营企業を個人経営の企業にかえてしまった」。かれらはひそかに軍需品以外の生産をおこない、三年間に万年筆の販売だけで一二〇万旧ルーブルを着服した。これらの連中のなかには、「一生、窃盗をはたらいてきた」「一九二〇年代」の「投機商人」もいる。^⑬

ウズベクのある絹織物工場の工場長は、技師長、会計主任、販売課長、職場主任などとグルになって、「新しい企業家」になった。かれらはさまざまにコネを通じて、十数トンもの人絹と純絹原料を買い入れ、「帳簿につけない製品を生産していた」。かれらはひそかに労働者を募集し、「十二時間労働制を實行していた」^⑭

ハリコフのある家具工場の工場長は、工場のなかに「ヤミのメリヤス工場」をつくつて、投機的な生産をおこなっていた。この工場長は「いく人も妻、いく台もの乗用車、いく軒もの家屋、一七六本のネクタイ、一〇〇着にちかいワイシャツ、数十着の背広をもち」、競馬場での大ばく徒でもあった。^⑮

こうした連中の活動はけつして孤立したものではない。かれらはつねに国家の物資供給部門、

商業系統その他の部門の勤務人員と結びつき、警察や司法機関のなかにも自分の保護者や代理人をもち、さらには国家機関のなかの高級幹部の支持や庇護さえもうけている。たとえば、つぎのような実例がある。

モスクワ精神病予防治療所のある付属工場の工場長とその仲間、^⑯「ヤミ企業」をつくり、ワイロをつかつて、「五八台のメリヤス機」と大量の原料を「手に入れ」、^⑰「五二の工場、手工業協同組合、コルホーズ」とコネをつけ、数年のあいだに三〇〇万ルーブルもかせいだ。かれらは社会保安機関の勤務人員、監査係、検査係、巡視係などを買収していた。^⑱

ロシア連邦のある機械製造工場の工場長は、もう一つの機械製造工場の副工場長その他の要員など合計四三人とグルになって、九〇〇余台の紡織機を盗み、中央アジア、カザフスタン、カフカズなどの工場に売つて、これらの工場の指導者にヤミ生産をやらせた。^⑲

キルギスの四、五〇人からなる汚職・窃盗グループは、じぶんたちのにぎっている二つの工場でヤミ生産をおこなったが、かれらの盗んだ国家財産は三〇〇〇万ルーブルをこえていた。このグループには、共和国計画委員会議長、商業省次官や、共和国閣僚会議、国民経済委員会、国家統制委員会など各部門の七名の局長と課長、それに「流刑先から逃げかえつてきた大富農」までくわわっていた。^⑳

こうした実例をみてもわかるように、これらの墮落変質分子がにぎっている工場は、名義のうえでは社会主義的企業でも、実際にはかれらが金儲けをするための資本主義的企業に変わってしまったている。かれらと労働者の関係も、搾取と被搾取、抑圧と被抑圧の関係に変わってしまった。このような墮落変質分子はいちぶの生産手段を占有し、支配して、他人の労働を搾取している。これが真正正銘のブルジョア分子でなくてなんだろうか。国家機関のなかで職務についているかれらの仲間たちは、かれらと気脈をつうじ、不正をはたらき、私利をはかり、ワイロをうけ、ふところ手をして分け前にあずかり、さまざまの搾取活動にくわわっている。これまた真正正銘のブルジョア分子でなくてなんだろうか。

こうした連中がすべてプロレタリアートに敵対する階級に属し、ブルジョアジーに属していることはきわめてあきらかである。かれらの反社会主義的活動は、ブルジョアジーがプロレタリアートを攻撃する階級闘争にほかならない。

われわれはさらにコルホーズに巣くう各種各様の富農分子の活動を見てみることにしよう。

いちぶのコルホーズの指導者とその仲間たちは、思いのままに汚職・窃盗をはたらき、投機、空取引をおこない、勝手放題に金をつかい、コルホーズ農民を搾取している。たとえば、つぎのような実例がある。

ウズベクのあるコルホーズの議長は、「村ぜんたいを恐怖のなかにおとし入れていた」。コルホーズの重要ポストはすべて、「かれの多くの姉むこ、妹むこ、義弟、姻戚、その他の親類や友人にのつとられていた」。かれは「個人的な欲望をみたすために、コルホーズの一三万二〇〇〇ルーブルを使いこんだ」。かれは、一台の乗用車、二台のオートバイ、三人の妻をもち、「かの女たちにそれぞれ一軒の家をもたせていた」^{①9}

クルスク州のあるコルホーズの議長は、コルホーズを自分の「領地」とみなしていた。かれは、会計係、出納係、倉庫主任、農業技師、商店の主任などとグルになって、互にかばいあい、「コルホーズの農民を搾取し」、数年間のうちに十数万ルーブルを横領した。^{②0}

ウクライナのあるコルホーズの議長は、会計係と共謀して関係書類と帳簿を偽造し、コルホーズの五万ルーブルあまりを盗んだ。この会計係は「模範会計係」ともちあげられ、その業績はモスクワでひらかれた国民経済成果展覧会でも紹介されたことがある。^{②1}

アルマアタ州のあるコルホーズの議長は、投機取引に専念した。かれは「ウクライナやウズベクから醸造用の果汁を買い、ジャンプールから砂糖とアルコールを買い入れて」加工したうえ、いたるところでこれを高値で売りさばいた。このコルホーズには年産百万リットルの醸造工場があつて、カザフ共和国のすみずみに投機取引網をはりめぐらし、投機売買はこのコルホーズのお

もな収入源のひとつになっていた。²³⁾

白ロシアのあるコルホーズの議長は、「封土をあたえられた大名きどり」で、「なんでも独断で処理していた」。かれはコルホーズなどには住まないで、都会か、じぶんの「豪華な別荘」に住み、いつも「いろいろな商売の経営に忙しく」、「投機取引」に明け暮れていた。かれはよそから家畜を買ってきて、自分のコルホーズの家畜だといつわり、ウソの生産成績を報告していた。だが、それにもかかわらず、かれは、「いつもほめたたえられる」「模範的な指導者」になっていた。²⁴⁾

こうした実例からもわかるように、これらのコルホーズの指導者がにぎっているコルホーズは、実際には、かれらの私有財産に変わってしまったている。かれらは社会主義的な集団経済を新しい富農経済に変えてしまった。かれらは多くのばあい上級の指導機関に自分の保護者をもっている。かれらとコルホーズ農民との関係も、抑圧と被抑圧、搾取と被搾取の関係に変わってしまったている。農民の上にあぐらをかくこうした新しい搾取者は、真正正銘の新しい富農分子でなくてはならない。

こうした連中がすべてプロレタリアートと勤労農民に敵対する階級に属し、富農階級、つまり農村ブルジョアに属することは、きわめてあきらかである。かれらの反社会主義的活動は、

ブルジョアがプロレタリアートと勤労農民を攻撃する階級闘争にはかならない。

国营企業とコルホーズ以外にも、ソ連の都市と農村にはまだ多くのブルジョア分子がいる。

こうした連中のなかには、個人的に企業を経営して、個人的に生産と販売をおこなっているものもあれば、個人的に工事請負組をつくって、国营企業あるいは協同組合企業の建築工事を公然と受けおっているものもあり、また、個人的に旅館を経営しているものもある。レニングラードのある「ソ連の婦人資本家」は、労働者を雇って、ナイロンブラウスの生産と販売をおこない、「日に七〇〇新ブルーブルもかせいだ」²⁵⁾。クルスク州のある小工場の工場主は、防寒用のフェルト靴をつくって、高値で売りさばいた。この工場主は、フェルト靴五四〇足、金貨八キロ、衣料三〇〇メートル、じゅう毯二〇枚、羊毛一二〇〇キロなど、大量の物資をもっていた²⁶⁾。ゴメル州のある個人経営企業主は、「労働者と職人を雇い入れて」、二年間のうちに一二の工場の焙焼炉建設工事や大がかりな修理工事を高値で受け負った²⁷⁾。オレンブルグ州には「いく百もの私営の旅館と貨物倉庫があり」、「コルホーズと国家の金がぞくぞくと旅館経営者の財布に流れこんでいる」²⁸⁾

かれらのうちのあるものは、投機取引をおこない、安く買いたたき、高く売りつけ、品物を遠くへはこんで、暴利をむさばっている。現にモスクワには、農産物の投機商人がたくさんいる。

かれらは「何トンものミカン、リンゴ、各種野菜をモスクワにはこび、ヤミ値で売りさばいている」。「なかには、営利一点ばりの連中のためにあらゆる便宜をはかつてやり、市場付設の宿泊所や保管倉庫その他の設備を使わせてやるものもいる」²⁸。クラスノダール地方のある投機商人はじぶんの「商事会社」をつくり、「販売員一二人と運搬夫を二人やとって」「千頭ものブタ、数百ピクルの食糧、数百トンの果物」を農村からドンパスにはこび、また、「盗んできたおびただしい鉄渣煉瓦、貨車いっぱいガラス」、その他の建築資材を都市から農村にはこんで、この取引で暴利をむさぼっていた。²⁹

かれらのもものは、専門に仲買人やブローカーとなつてゐる。こうした連中は交際範囲がひろく、かれらにワイロさえつかえば、なんでも手にいれてくれる。レニングラードのある仲買人などは、「商業相でもないのに、すべての品物をその手ににぎつており、鉄道係官の肩書もないのに、車両を支配している」。かれは「調達手続きのきびしい品物でも、調達以外の方法で手に入れることができる」。「レニングラードの倉庫という倉庫はみな、かれのために奉仕している」。かれは自分の手をとつた商品から莫大な「報酬」をえており、一九六〇年だけでもある林業会社から七〇万ルーブルをうけとつた。レニングラードには、こうした仲買人が「たくさん」いる。³⁰

これらの個人経営企業主と投機分子は、ロコツな、資本主義的搾取の行為をはたしているのである。かれらがプロレタリアートに敵対するブルジョアジーに属しているということ、これは明々白々なことでなくてなんであらうか。

じじつ、ソ連の新聞・雑誌じしんも以上のような連中を、「ソ連の資本家」「新しい企業家」「個人経営の企業主」「新しい富農」「投機商人」「搾取者」などとよんでいる。フルシチョフ修正主義集団は、ソ連に敵対階級は存在しないといはつてゐるが、これは自分で自分の頬を打つことになるのではないだろうか。

われわれが以上に引用した資料は、ソ連の新聞・雑誌がみずから公表したいちぶの実例にすぎない。これらの事実だけでも、まことに驚くべきものであるが、ソ連の新聞・雑誌がまだ公表していない事実、おおいかくし、かばつてゐる、もつと大きな、もつとゆゆしい事実、まだまだたくさんある。われわれがこれらの資料を引用したのは、ソ連にははたして敵対的な階級と階級闘争があるのかないのかというこの問題に答えるためである。これらの資料は、多くの人が容易に目にしうるものであり、フルシチョフ修正主義集団じしんも否定できないものである。

これらの資料だけでも説明できるように、ソ連では、都市から農村にいたるまで、工業から農業にいたるまで、生産の領域から流通の領域にいたるまで、経済部門から党と国家機構にいたる

まで、末端部から高級指導機関にいたるまで、どこにも、プロレタリアートに敵対するブルジョアジーのきちがいじみた活動がたくさんあらわれている。これらの反社会主義的活動こそは、ほかでもなくブルジョアジーがプロレタリアートにたいしてすすめている鋭い階級闘争である。

社会主義国に、社会主義にたいする新旧ブルジョア分子の攻撃があらわれてくるといふこと、これはもともと不思議なことではない。党と国家の指導がマルクス・レーニン主義的なものであるかぎり、それも恐るるにはたりないものである。しかし、こんにちのソ連における問題の重大性は、フルシチョフ修正主義集団がソ連の党と国家の指導をのっとり、ソ連の社会にブルジョア的特権階層が生まれたということにある。

では、つぎにこの問題についてのべることにしよう。

ソ連の特権階層とフルシチョフ修正主義集団

現在、ソ連社会の特権階層は党と政府機関および企業、コルホーズの指導的幹部のなかの墮落変質分子やブルジョア知識人によって構成されており、ソ連の労働者、農民、広はんな知識人、幹部と対立するものである。

はやくも十月革命後の初期にレーニンは、ブルジョアジーと小ブルジョアジーのイデオロギ―、かれらの習慣の力が各方面からプロレタリアートを包囲し、浸食し、プロレタリアートの個別的階層を腐食していたことを指摘している。こうした状況のもとで、ソビエト機関の職員のみだに大衆からうきあがった官僚主義分子が生みだされるばかりでなく、新しいブルジョア分子も生みだされていた。レーニンはさらに、ソビエト政権が留用したブルジョア技術専門家にたいして高給制を実施することが必要であるとはいえ、それは腐敗作用をもっており、ソビエト政権にまで影響をあたえる、と指摘している。

したがって、当時、レーニンはブルジョアジーと小ブルジョアジーの思想的影響にたいして、うまざつたゆまざつた闘争するようひじょうに強調していた。また、広はんな大衆を動員して国家の管理活動に参加させ、ソビエト機関内の官僚主義分子と新しいブルジョア分子をたえず摘発、粛清するとともに、ブルジョアジーが存在することもできなければ再び生まれることもできないようにする条件をつくりだす必要がある、とひじょうに強調していた。レーニンはかつて、「国家機構を改善するための系統的で、ねばりづよい闘争がなかつたら、われわれは社会主義の土台をつくりださないうちにほろびるのであろう」^⑧と、するどく指摘している。

同時に、レーニンは、賃金政策では、パリ・コミューンの原則、つまり、すべての公務員

は、労働者の賃金に相当する俸給だけをうけとるべきで、ブルジョア専門家にたいしてだけ高給を支給するという原則を堅持すべきである、とひじょうに強調していた。十月革命後から国民経済回復期までは、ソ連は基本的にレーニンの指示を実施していた。そして、党と政府機関の責任者、企業の責任者、専門家のなかの共産党員の俸給は、ほぼ労働者の賃金に相当するものであった。

当時、ソ連共産党とソ連政府は一連の措置をこうして、政治、思想と分配制度の面から、各部門で指導的な仕事を担当している幹部の職権乱用、腐敗墮落、退廃変質を防止した。

スターリンをはじめとするソ連共産党はプロレタリアート独裁と社会主義の道を堅持して、資本主義勢力とだんこたる闘争をおこなった。当時、スターリンがトロツキー分子、ジノビーエフ分子、ブハーリン分子などにたいしておこなった闘争は、実質的にはプロレタリアートとブルジョアジーとの階級闘争が党内に反映したものであり、また、社会主義と資本主義の二つの道の闘争が党内に反映したものである。これらの闘争の勝利は、ソ連で資本主義の復活を実現させようと夢みるブルジョアジーの陰謀をうちくいたのである。

スターリンの逝去以前に、ソ連ですべてに一部の人をたいして高給制を実施しており、一部の幹部がブルジョア分子に変質していたことは否定できない。一九五二年十月にひらかれたソ連共

産党第十九回大会におけるソ連共産党中央委員会の報告ではこう指摘されている。一部の党組織のなかには、墮落と腐敗の現象がみられる。一部の党組織の指導者は、党組織を自分の身内ものからなる小さな家庭にかえており、「かれらの小集団の利益を党と国家の利益のうえにおいている」。一部の工業企業の指導者は、「かれらに管理、指導をゆだねた企業が国营企業であることを忘れ、こともあろうにこれらの企業をその世襲の領地にかえようとしている」。一部の党組織、ソビエト機関、農業機構の要員は、「コルホーズの共有経済の利益を保護するどころか、逆にコルホーズの財産を窃取している」。文化・芸術や科学などの部門でも社会主義制度を攻撃、中傷する作品があらわれ、科学者集団の「学閥的」な独占現象があらわれていた。

フルシチョフがソ連の党と国家の指導をのっとってから、ソ連における階級闘争の情勢には根本的な変化がおこった。

フルシチョフは一連の修正主義的政策を実施して、ブルジョアジーの利益に奉仕し、ソ連の資本主義勢力を急激に拡大させた。

フルシチョフは「個人迷信反対」の看板のもとで、プロレタリアート独裁と社会主義制度をみなくいものにえがき出しているが、これは事実上、ソ連で資本主義復活の道をきりひらいたものである。かれはスターリンを全面的に否定しているが、これは実質上、スターリンが堅持したマ

ルクス・レーニン主義を否定し、修正主義の思潮をはらんさせるために水門をひらいたものにほかならない。

フルシチョフはいわゆる「物質による刺激」をもって、社会主義の「各人はその能力に応じて働き、その労働に応じて分配をうける」という原則とすりかえ、ごく少数のものと労働者、農民、一般知識人のあいだの収入差を縮小するのではなく、それを拡大し、指導的地位に巣くつている墮落変質分子を育成することによって、かれらによりほしいままに職権を利用させ、ソ連人民の労働の成果を横取りさせ、ソ連社会の階級分化を激化させている。

フルシチョフは社会主義の計画経済を破壊し、資本主義の利潤の原則を実施し、資本主義的自由競争を發展させ、社会主義の全人民的所有制を解体させている。

フルシチョフは社会主義の農業における計画制度を攻撃し、それを「官僚主義的なもの」であり、「不必要なもの」であるといっている。かれはアメリカの農場主に学ぶことに熱中し、資本主義的経営方式を提唱し、富農経済を育成して社会主義の集団経済を解体させている。

フルシチョフはブルジョアジーのイデオロギーを盛んに宣伝し、ブルジョアジーの自由、平等、博愛、ヒューマニズムを盛んに宣伝し、ソ連人民にブルジョアジーの観念論、形而上学およびブルジョアジーの個人主義、人道主義、平和主義の反动思想をつぎこみ、社会主義の道徳・気

風をみだしている。腐りきった西側のブルジョア文化が流行し、社会主義文化が排斥され、打撃されているのである。

フルシチョフはいわゆる「平和共存」の看板のもとで、アメリカ帝国主義と結託して、社会主義陣営と国際共産主義運動を破壊し、各国の被抑圧人民と被抑圧民族の革命闘争に反対し、大国外排主義と民族利己主義をおしすすめ、プロレタリア国際主義を裏切っている。これらはすべて、ひとにぎりのものの既得利益をまもり、かれらの利益をソ連人民、社会主義陣営各国人民および全世界人民の根本的利益のうえにおくためである。

フルシチョフが実行しているのは徹頭徹尾の修正主義路線である。こうした路線のもとで、旧ブルジョア分子が気違いじみた活動をおこなうばかりでなく、ソ連の党と政府の指導的幹部、国営企業とコルホーズの責任者、文化、芸術、科学技術などの部門の高級知識人のあいだにも大勢の新しいブルジョア分子が生まれただのである。

いま、ソ連では、新しいブルジョア分子が数のうえで空前の増加をみせているばかりか、その社会的地位の面でも根本的な変化をとげている。フルシチョフが政権の座につくまでは、かれらはソ連の社会で支配的な地位を占めてはいなかったし、かれらの活動はさまざまの制約や打撃をうけていた。フルシチョフが政権の座についたのち、そしてかれが党と国家の指導権を一步一步

のつとるにもなつて、これらの分子は党、政府、経済、文化などの部門で支配的な地位を占めるようになり、ソ連社会における特権階層を形成するにいたつたのである。

この特権階層は、現在におけるソ連のブルジョアシーの主要な構成部分であり、フルシチョフ修正主義集団の主要な社会的基礎である。フルシチョフ修正主義集団は、ほかでもなくソ連のブルジョアシー、とりわけこの階級のなかの特権階層の政治面での代表なのである。

フルシチョフ修正主義集団は全国的に、中央から地方、党と政府の指導機関から経済、文化・教育部門にわたつて、つぎつぎと肅清をおこない、つぎつぎと多数の幹部を更迭し、自分たちの信頼できない人びとをしりぞけ、自分たちの側近を指導的ポストに配置している。

ソ連共産党中央委員会についていえば、統計はつぎのことを示している。つまり、一九五六年のソ連共産党第二十回大会と一九六一年の第二十二回大会を経て、一九五二年の第十九回大会で選出されたソ連共産党中央委員の七〇パーセント近くが肅清されている。また、一九五六年のソ連共産党第二十回大会で選出されたソ連共産党中央委員も、一九六一年の第二十二回大会のときに、その五〇パーセント近くが肅清されている。

さらに地方の各級組織についていえば、おおまかな統計はつぎのことを示している。つまり、ソ連共産党第二十二回大会の直前、フルシチョフ修正主義集団はいわゆる「幹部更新」に名をか

りて、各加盟共和国の党中央委員会、地方党委員会および州委員会のメンバーの四五パーセントを更迭し、市委員会と区委員会の成員の四〇パーセントを更迭した。一九六三年、フルシチョフ一味はまたもや、いわゆる「工業党委員会」と「農業党委員会」を分けるという口実で、各加盟共和国の党中央委員会と州委員会のメンバーの半数以上を更迭したのである。

この一連の異動によつて、ソ連の特権階層はソ連の党と政府およびその他の重要部門を支配するにいたつたのである。

この特権階層は、人民に奉仕する職権を人民大衆を支配する特権にかえ、生産手段と生活資料を支配するかれらの権力を利用して、自分たちの小集団の私利をむさぼっている。

この特権階層は、ソ連人民の労働の成果を横取りし、ソ連の一般労働者、農民にくらべて数十倍、ひいては百倍にも達する収入をふところにいれている。かれらは高給、多額のボーナス、多額の原稿料および多種多様な名目をもつた個人への給与外手当によつて高額の収入をえているばかりか、特権的地位を利用して、不正を働き、私利をはかり、汚職や収賄をおこない、私腹をこやしている。かれらは、生活面で完全にソ連の勤労人民から遊離し、寄生的な、腐敗したブルジョア生活をおくっている。

この特権階層は、思想面では完全に変質しており、ボルシェビキ党の革命的伝統にまったく背

をむけ、ソ連労働者階級の遠大な理想を放棄している。かれらはマルクス・レーニン主義に反対し、社会主義に反対している。かれらは自分が革命を裏切っているばかりでなく、他の人にも革命をおこなうことをゆるさない。かれらはひたすら、どのようにして自分の経済的地位と政治的支配をうちかためるかということを考えている。かれらのあらゆる活動は、ことごとく特権階級の私利に合致するかどうかに左右されるのである。

フルシチョフ一味はソ連の党と国家の指導部をのつとつたのち、いまや、光栄ある革命の歴史をもつマルクス・レーニン主義のソ連共産党を修正主義の党にかえ、プロレタリアート独裁のソビエト国家をフルシチョフ修正主義集団の独裁国家にかえつつある。また、社会主義の全人民的所有制と集団的所有制を一步一步と特権階層の所有制にかえつつある。

人びとが目にしてるように、ユーゴスラビアでは、チトー一味はあいかわらず「社会主義」の旗じるしをかかげてはいるが、かれらが修正主義の道にふみこんでから、ユーゴスラビア人民と対立する官僚ブルジョアジーがしだいに形成され、そのため、ユーゴスラビアをプロレタリアート独裁の国家から官僚ブルジョアジー独裁の国家にかえ、ユーゴスラビアの社会主義的共有経済を国家資本主義にかえた。いまや、人びとはまた、フルシチョフ一味がチトー一味のかつて歩んだ道を歩みつつあるのを目にしているのである。フルシチョフはベルグラード詣でおこな

い、一再ならずチトー一味の経験に学ばなければならないといっている。そのみか、かれとチトー一味は「同一の思想に属し、同一の理論を指針としている」^②と公言している。これは少しも怪しむにたりないことである。

フルシチョフの修正主義によって、偉大なソ連人民が血と汗でつくりあげた世界最初の社会主義国は、いまや、かつてない資本主義復活の重大な危険にさらされている。

フルシチョフ一味は、「ソ連にはもはや敵対階級や階級闘争は存在しない」と大いに宣伝しているが、これは、かれらがソ連人民にたいして残酷な階級闘争をおこなっている真相をおおいかくすためである。

フルシチョフ修正主義集団の代表するソ連の特権階層は、ソ連人口の数パーセントを占めているにすぎない。かれらはソ連幹部の隊列中でもごく少数を占めているにすぎない。かれらは、ソ連人口の九〇パーセント以上をしめるソ連人民やソ連の広はん幹部、共産党員とは根本的に対立している。ソ連人民とかれらのあいだの矛盾は、現在ソ連国内における主要な矛盾であり、和解できない敵対的な階級矛盾である。

レーニンがつくりあげた光栄あるソ連共産党、偉大なソ連人民は、十月社会主義革命のなかで天地をきりひらくような革命的創造精神を発揮し、白衛軍と十いくつかの帝国主義国の武力干渉

にうち勝つなかで刻苦奮闘する英雄的気概をしめし、工業化と農業集団化の闘争のなかで史上空前のかがやかしい成果をあげ、ドイツ・ファシズムに反対する大祖国防衛戦争のなかで人類を救う偉大な勝利をかちとつたのである。フルシチョフ一味の支配のもとにおいてさえ、ソ連共産党の広はんな党員とソ連人民は、レーニンとスターリンがはぐくんだ光栄ある革命的伝統をうけついでおり、社会主義を堅持し、共産主義をめざしている。

広はんなソ連の労働者、集団経営の農民、知識人は、特権階層の抑圧と榨取にこのうえない不満をいだいている。かれらは、社会主義を裏切り、資本主義を復活させているフルシチョフ一味の修正主義の正体をますますはつきりと見ぬいている。ソ連の幹部の隊列のなかには、依然としてプロレタリアートの革命的立場を堅持し、社会主義の道を歩むことを堅持している人がたくさんいる。かれらはフルシチョフの修正主義にはあくまで反対している。いま、ソ連の広はんな人民大衆、共産党員、幹部は、種々さまざまの方法を講じて、フルシチョフ一味の修正主義路線をおしとどめ、それに反抗し、フルシチョフ修正主義集団がほしのままに資本主義の復活を実現できないようにしている。いま、偉大なソ連人民は、偉大な十月革命の光栄ある伝統をまもり、社会主義の偉大な成果をまもり、資本主義復活の陰謀を粉碎するためにたたかっている。

いわゆる「全人民の国家」を反ばくする

ソ連共産党第二十二回大会で、フルシチョフは、プロレタリアート独裁反対の旗じるしを公然とかかげた。フルシチョフはいわゆる「全人民の国家」をもって、プロレタリアート独裁の国家にとつてかわらせると宣言した。ソ連共産党の綱領には、「プロレタリアート独裁は、ソ連ではもはや必要でなくなっている。プロレタリアート独裁の国家として生まれた国家は、新たな段階、つまり現在の段階では、全人民の国家にかわっている」とのべられている。

ほんの少しでもマルクス・レーニン主義の常識をもっている人なら、だれでも、国家とは一つの階級的概念であるということを知っている。レーニンは、「国家の特徴は、権力を自分の手中に集中した特殊な階級の存在にある」^⑧と指摘している。国家は階級闘争の道具であり、一つの階級が他の階級を抑圧する機関である。どんな国家も、特定の階級の独裁の国家である。国家が存在するかぎり、それは超階級的なものではありえないし、全人民的なものではありえない。

プロレタリアートとその政党は、これまで自分の観点をかくしたことはなかったし、またプロレタリア社会主義革命とは、ほかでもなく、ブルジョアジーの支配をくつがえして、プロレタリ

アート独裁をうちたてることであると、はつきり宣言している。社会主義革命が勝利してから、プロレタリアートとその政党は、プロレタリアート独裁の歴史的任務を実現し、階級と階級差異を一掃し、国家を死滅させるためにうまずたゆまずたたかわなければならぬ。ただブルジョアジーとその政党だけが、国家権力の階級の本質をひたかくしにし、百万手をつくして、かれらのにぎっている国家機構は「全人民的なもの」であり、「超階級的なもの」であるといくゝるめ、人民大衆をあざむこうとするのである。

フルシチョフはソ連のプロレタリアート独裁を解消すると宣言し、いわゆる「全人民の国家」をもちだしたが、これこそ、かれがブルジョアジーのつくり話をもって、マルクス・レーニン主義の国家学説におきかえていることをあきらかにしめしている。

フルシチョフ修正主義集団は、かれらの謬論がマルクス・レーニン主義者の批判をあびたのち、あわてふためいて弁解につとめ、やつきになって「全人民の国家」のために「理論的」根拠をデッチあげようとしている。かれらはいふ。マルクスとレーニンがのべたプロレタリアート独裁の歴史的時期とは、資本主義から共産主義の第一段階への移行の時期をさしているだけで、資本主義から共産主義の高い段階への移行の時期をさしているのではない、と。かれらはまた、「プロレタリアート独裁は国家の死滅するまえに、必要でなくなるものである」²⁴、そしてプロ

レタリアート独裁が終わりをつげたのちにもまだ「全人民の国家」という段階がある、とのべている。

これは徹頭徹尾の詭弁である。

マルクスは『ゴータ綱領批判』のなかで、プロレタリアート独裁は資本主義から共産主義への過渡期の国家であるという有名な原理を提起している。マルクスのこの原理について、レーニンはかつて明確な解釈をおこなっている。

レーニンは、「マルクスはゴータ綱領を批判したときこう書いている。『資本主義社会と共産主義社会とのあいだには、前者から後者への革命的転化の時期がある。この時期に照応して、また政治上の過渡期がある。この時期の国家はプロレタリアートの革命的独裁でしかありえない』と。こんにちまで、この真理は、社会主義者にとって、議論の余地のないものであった。そしてこの真理のうちには、勝利した社会主義が完全な共産主義へ成長転化するまでは国家を承認するということがふくまれている」²⁵とのべている。

レーニンはまた、「一階級の独裁が階級社会一般にだけ必要なのではなく、またブルジョアジーをうちたおしたプロレタリアートにだけ必要なのではなく、さらに資本主義から『無階級社会』へ移行し、共産主義に移行する歴史的時期全体にも必要である。この点を理解した人だけが、マ

ルクスの国家学説の本質を会得したといえる」^⑧とのべている。

マルクスとレーニンがのべているプロレタリアート独裁の国家が存在する歴史的時期とは、けつしてフルシチョフ修正主義集団がいつているように、資本主義から共産主義の第一段階への移行の時期だけをさしているのではなく、資本主義から「完全な共産主義」へ移行する時期、すべての階級差異の廃絶と「無階級社会」の実現へ移行する時期、つまり共産主義の高い段階へ移行する時期をさしていることは、ひじょうに明白である。

マルクスとレーニンがのべている過渡期の国家が、プロレタリアート独裁でしかありえず、他のいかなるものでもありえないことは、同様にきわめて明白である。プロレタリアート独裁は、資本主義から共産主義の高い段階への過渡期の国家形態であり、また人類史上の最後の国家形態でもある。プロレタリアート独裁の死滅は、国家の死滅にはかならない。レーニンは、「マルクスは、社会主義と政治闘争の歴史全体から結論をくだして、国家は消滅するにちがいない、国家の消滅する過渡的形態（国家から非国家への移行）は、『支配階級として組織されたプロレタリアート』であろうといった」^⑨とのべている。

歴史の発展過程において、プロレタリアート独裁は、あれこれの国、あれこれの階段では、異なった形態がありうるであろうが、本質的には同じである。レーニンは、「資本主義から共産主

義への移行は、もちろん、きわめて多種多様な政治形態をもたらざるをえないが、しかしそのさい、本質は不可避免的にただひとつ、プロレタリアート独裁であろう」^⑩とのべている。

これから見ても、プロレタリアート独裁は国家の死滅に先だつて終わりをつげるとか、プロレタリアート独裁が終わりをつげたあとにまだ「全人民の国家」という段階があるとか考えることは、まったくマルクスやレーニンの観点ではなく、フルシチョフ修正主義者のデッチあげであることがわかるのである。

フルシチョフ修正主義集団はかれらの反マルクス・レーニン主義的観点を弁護するために、また苦心してマルクスのひとつのことばをさがし出し、その首尾をきりすて、それをねじまげていく。かれらは、マルクスが『ゴータ綱領批判』のなかでのべた「共産主義社会の未来の国家制度」を、「もはやプロレタリアート独裁ではない『共産主義社会の国家組織』」^⑪だと強弁している。かれらは、中国人にはマルクスのこのことばを引用する勇気がないとすこぶる得意げにいつている。フルシチョフ修正主義集団から見れば、マルクスのこのことばはかれらにとって、ほんとうになにかの役にたちそうである。

レーニンは早くから、修正主義者がマルクスのこのことばを利用して、マルクス主義をねじまげることが、予見していたようである。レーニンは『マルクス主義の国家論』という著書のなか

で、マルクスのこのことばにきわめてすぐれた説明を加えている。レーニンはこうのべている。「プロレタリアート独裁は『政治上の過渡期である』」、「しかしマルクスはつづいて、『共産主義社会の未来国家制度!!』にふれている。いいかえれば、『共産主義社会』においてさえまだ、国家制度がある!!」ということである。これは矛盾するではないか? 「矛盾していない」とレーニンは答えている。つづいてレーニンは表をつかつて、ブルジョア国家から国家死滅にいたる発展の三つの時期を説明している。

第一の時期、資本主義社会ではブルジョアジーは国家を必要とする、この国家はブルジョアジーの国家である。

第二の時期、資本主義から共産主義に移行する時期では、プロレタリアートは国家を必要とする、この国家はプロレタリアート独裁の国家である。

第三の時期、共産主義社会では、国家を必要としない、国家は死滅する。

レーニンは、「これはまったく論理にかなっており、しかもきわめて明快である!!」とのべている。

レーニンの表には、ブルジョア国家、プロレタリアート独裁の国家、国家の死滅、これだけしかない。レーニンは表をつかつて、共産主義社会になれば国家が死滅するのだから、国家制度と

いうものもなくならないことを説明したのである。

至極こつけないことは、フルシチョフ修正主義集団は自分の誤りを弁解するにあたって、ことあるうちに、やはりレーニンの『マルクス主義の国家論』という著書のこの一節のこつばを引用している。かれらはレーニンのこつばを引用したあと、「わが国では、レーニンがその断定的なかで指摘した前の二つの時期は過去の歴史になっている。ソ連では、全人民の国家——共産主義の国家制度、つまり共産主義の第一段階の国家制度が生まれ、いま、たえず発展しつつある」⁴⁰とわけのわからぬことをいっている。

もし、レーニンのいった前の二つの時期がソ連で、すでに過去の歴史になったというならば、かれらのところでは、国家はすでに死滅したはずなのに、どうしてまた「全人民の国家」というものがあらわれうるのだろうか。もし国家がまだ死滅していないというならば、それはプロレタリアート独裁でしかありえず、絶対に「全人民の国家」などというしろものではありえない。

自分たちの「全人民の国家」を弁解するため、フルシチョフ修正主義集団はまた、やつきになつてプロレタリアート独裁は非民主的だと誹謗している。かれらは、「全人民の国家」をもつてプロレタリアート独裁の国家にとつてかわらせてこそ、はじめて民主主義をいちだんと発展させ

ることができ、民主主義を「真の全人民の民主主義」にかえることができる、と盛んに宣伝している。フルシチョフは、プロレタリアート独裁を解消することは「民主主義の路線を極力発展させる」こと、「プロレタリア民主主義がいまや全人民の社会主義的民主主義にかわりつつある」④⑤ことを反映しているとさえ、もったいぶつてのべている。

これらの言論は、かれらがマルクス・レーニン主義の国家学説にはまったく無知であるうえに、それに悪意にみちた歪曲をおこなっていることを物語っているにすぎない。

ほんの少しでもマルクス・レーニン主義の常識をもっている人なら、だれでも、一種の国家形態としての民主主義は独裁と同様、ともに階級的概念であることを知っている。階級的な民主主義が存在するだけであって、「全人民の民主主義」などというものは存在しないのである。

レーニンは「人民の多数者のための民主主義と、搾取者、人民の抑圧者にたいする暴力的抑圧、つまり民主的生活からの排除——これこそ資本主義から共産主義への過渡期における民主主義制度である」④⑥と、のべている。プロレタリアート独裁が搾取階級にたいして独裁を行使し、勤労人民のあいだで民主主義を實行するということが、これは一つの問題の二つの側面である。プロレタリアート独裁のみが、勤労大衆の民主主義を発展させ、それをかつてなかつた程度に拡大することができる。プロレタリアート独裁なしには、勤労人民の真の民主主義はありえないのである。

いのである。

ブルジョアジーの民主主義のあるところでは、プロレタリアートの民主主義はありえない。プロレタリアートの民主主義のあるところでは、ブルジョアジーの民主主義はありえない。一方が他方を消滅させる、これが事の唯一の成行であって、妥協はありえないのである。ブルジョアジーの民主主義が、いっそう多く、いっそう完全に消滅されればされるほど、プロレタリアートの民主主義は、それだけ大いに拡張されるのである。こうした状態は、ブルジョアジーからみれば、その国家には民主主義が存在しないということになる。実際には、これがプロレタリア民主主義をおこし、ブルジョア民主主義をなくするということであって、プロレタリアートの民主主義がさかんなれば、ブルジョアジーの民主主義は消滅されるのである。

フルシチョフ修正主義集団はマルクス・レーニン主義のこの根本的な観点に反対している。実際には、かれらは、敵にたいして独裁をおこなうかぎり、民主主義をうんぬんすることはできない、そして民主主義を発揚するには、敵にたいする独裁と弾圧をやめ、「全人民の民主主義」なるものを実行するほかはない、と考えている。

このような観点は、裏切り者カウツキーの「純粋民主主義」の観点と同じ鋳型でつくりだされたものである。

レーニンはカウツキーを批判して、「『純粹民主主義』とは、階級闘争を理解していないし、国家の本質をも理解していない愚論であるばかりか、まったくの空論でもある。なぜなら、共産主義社会では、民主主義は習慣となり、死滅していくであろうが、どこまでいっても『純粹』民主主義にはならないからである」⁽⁴³⁾とのべている。

レーニンはまた、「発展の弁証法（過程）」とはつぎのようなものである。専制制度からブルジョア民主主義へ、ブルジョア民主主義からプロレタリア民主主義へ、プロレタリア民主主義から、なんの民主主義もない段階へ⁽⁴⁴⁾と指摘している。いいかえれば、共産主義の高い段階では、階級は消滅し、プロレタリアート独裁は死滅し、プロレタリア民主主義もこれにもなつて死滅する。

うがつていえば、フルシチョフが盛んにいふらしている「全人民の民主主義」なるものは、いわゆる「全人民の国家」と同様、人をあざむくデタラメにすぎない。フルシチョフが、ブルジョアジーと古い修正主義者のぼろクズを拾いあげて、それをつくろい、それに自分のハンコをおしているのは、それをソ連人民と全世界の革命的人民をあざむく看板につかつて、プロレタリアート独裁を裏切り、社会主義に反対するかれの悪だくみをおいかくすためにほかならない。フルシチョフの「全人民の国家」の実質とは、いったいどんなものであろうか。

フルシチョフは、ソ連のプロレタリアート独裁を解消して、自分をかしらとする修正主義集団の独裁、つまりソ連のブルジョア特権階級の独裁をうちたてた。まぎれもなく、かれのいわゆる「全人民の国家」は、プロレタリアート独裁の国家ではなくて、ひとにぎりのフルシチョフ修正主義集団がソ連の広はん労働者、農民、革命的知識人にたいして独裁を執行する国家である。フルシチョフ一味の支配のもとでは、ソ連の勤労人民にとつての民主主義は、まったく存在せず、ひとにぎりのフルシチョフ修正主義集団にとつての民主主義、特権階層にとつての民主主義、新旧ブルジョア分子にとつての民主主義だけが存在しているのである。フルシチョフのいわゆる「全人民の民主主義」はかけ値なしのブルジョア民主主義であり、ソ連人民にたいするフルシチョフ一味の専制独裁である。

現在、ソ連では、もしプロレタリアートの立場を堅持し、マルクス・レーニン主義を堅持しあえて意見をのべ、立ちあがって反抗し、闘争しようとするなら、なに人によらず監視、尾行、訊問をうけ、はては逮捕、監禁されるか、またはむりやりに「精神病患者」だといいたてられて「精神病院」へおくりこまれる。最近、ソ連の新聞は、ほんのちよつとでも不満をもちた人にたいしては「闘争をおこなう」とか、フルシチョフの農業政策についてふたこと三こと「皮肉めいたこと」だけをいった人でも、「ろくでなし」として、「容赦ない打撃」をあたえなければなら

らない④と、公然とのべている。とくにおどろくべきことは、フルシチョフ修正主義集団がこともあるうに、労働者のストライキや大衆の反抗にたいして一度ならず血なまぐさい弾圧をおこなったことである。

「プロレタリアート独裁を解消して、全人民の国家を留保する」というこの公式は、フルシチョフ修正主義集団の内心の秘密、つまり、プロレタリアート独裁にはあくまで反対であり、国家権力は死んでも手放さないということを、ずばりといひあらわしている。フルシチョフ修正主義集団は国家権力をにぎるといふことのこのうえもない重要性を心得ている。かれらには、国家機構を利用して、ソ連の勤労人民とマルクス・レーニン主義者を抑圧することが必要なのである。かれらには、国家機構を利用して、ソ連で資本主義を復活させるために道をきりひろくすることが必要なのである。これこそ、フルシチョフが「全人民の国家」や「全人民の民主主義」という旗じるしをかかげた真のねらいなのである。

いわゆる「全人民の党」を反ばくする

ソ連共産党第二十二回大会で、フルシチョフはまた、ソ連共産党のプロレタリア的性格をかえ

るといふ旗じるしをうちだした。かれは、いわゆる「全人民の党」をもってプロレタリア政党内とつてかわらせると宣言した。ソ連共産党の綱領には、「ソ連における社会主義の勝利により、ソビエト社会の一致団結の強化により、労働者階級の共産党はすでにソ連人民の前衛となり、人民全体の党となった」とのべられている。ソ連共産党中央委員会の公開書簡にも、ソ連共産党はすでに「全人民の政治組織となった」とのべられている。

これはなんとというデタラメな、笑止千万なことであろう。

マルクス・レーニン主義の常識は、政党は国家と同じく階級闘争の道具である、とわれわれに教えている。すべての政党は、ことごとく階級性をもっている。党派性は階級性の集中的なあらわれである。非階級的、超階級的などというような政党はこれまでに存在しなかったし、特定の階級の利益を代表しないなどというようないわゆる「全人民の党」はこれまでに存在しなかった。

プロレタリア政党は、マルクス・レーニン主義の革命的理論と革命的作風にもとづいて創立された党であり、プロレタリアートの歴史的使命に限りなく忠誠である先進的な分子によつて組織された党であり、プロレタリアートの先進的な組織された部隊であり、プロレタリアートの最高の組織形態である。プロレタリア政党はプロレタリアートの利益を代表するものであり、プロレ

タリアートの意志を集中するものである。

プロレタリア政党はまた、人口の九〇パーセント以上を占める人民全体の利益を代表できるただひとつの政党でもある。それは、プロレタリアートの利益が広はんな勤労人民の利益と一致するからである。それは、プロレタリア政党がプロレタリアートの歴史的地位にもとづき、プロレタリアートや勤労大衆の当面と将来の利益にもとづき、最大多数の人びとの最大の利益にもとづいて、問題を考慮することができるところである。それは、プロレタリア政党がマルクス・レーニン主義にもとづいて正しい指導をおこなうことができるからである。

プロレタリア政党には、労働者階級出身の黨員のほかに、他の階級出身の黨員もふくまれている。これら非プロレタリアート出身の人びとは、他の階級の代表として党に参加したのではない。かれらは入党した最初の日から、かれらのもとの階級的立場を放棄して、プロレタリアートの立場に立たなければならぬ。マルクスとエンゲルスは、「他の階級のなかのこうした人びとが、プロレタリア運動に加わったならば、まず第一に、かれらがブルジョアの偏見や小ブルジョアの偏見などの残存物をいっさいもちこまず、無条件にプロレタリア世界観を身につけるよう、かれらに要求しなければならない」⁽⁴⁶⁾とのべたことがある。

プロレタリア政党の性格についての基本原理は、はやくからマルクス・レーニン主義によって

明らかにされている。ところが、フルシチョフ修正主義集団から見れば、これらはみな「紋切型の硬直した公式」であって、かれらのあの「全人民の党」こそ、「党発展の現実的な弁証法」にならなければならない⁽⁴⁷⁾。

フルシチョフ修正主義集団は苦心さんたんして「全人民の党」を弁護するいくつかの理由を考へ出した。かれらは、一九六三年七月の中ソ両党会談とソ連の新聞・雑誌で、ソ連共産党をいわゆる「全人民の党」にかえるのはつぎの理由によるのだといっている。

第一、ソ連共産党は全人民の利益を代表している。

第二、全人民は労働者階級のマルクス・レーニン主義の世界観をうけいれ、労働者階級の目標——共産主義をうちたてる——は、すでに全人民の目標となっている。

第三、ソ連共産党の隊列は、労働者、集団経営の農民、知識人のすぐれた代表によって組織されており、ソ連共産党は自己の隊列に百をこえる全国の民族と種族の代表を結集させている。

第四、党活動の民主的な方法も党の全人民的性格に合致している。

一目みただけでもわかるように、フルシチョフ修正主義集団が考へ出したこれらの理由は、どれひとつとして、かれらが厳粛な態度で厳粛な問題に対処していることを示すものはないのである。

レーニンは筋のとおらない話をする日和見主義者とたたかったとき、こうのべたことがある。「厳粛な態度で厳粛な問題に対処することが、明らかにできない連中と厳粛に語りあえるだろうか、どうか。同志諸君、それはむずかしい、ひじょうにむずかしいのである！ ところが、一部のものが厳粛に論じることのできない問題は、それ自体、ひじょうに厳粛なものであるから、こうした問題にたいする明らかに厳粛でない回答を検討してみるのも有益なことであらう」⁽⁴⁸⁾と。

そこでいま、われわれが、フルシチョフ修正主義集団がプロレタリア政党というこのような厳粛な問題にたいしておこなった明らかに不厳粛きわまる回答を検討してみるのもあながち無益なことではあるまい。

フルシチョフ修正主義集団の論法によれば、共産党は人民全体の利益をあらわしているから、「全人民の党」となるべきである。それなら、共産党はもとからプロレタリア政党であるべきではなくて、「全人民の党」であるべきではないだろうか。

フルシチョフ修正主義集団の論法によれば、人民全体が労働者階級のマルクス・レーニン主義の世界観をうけ入れたのだから、共産党は「全人民の党」となるべきである。しかし、現在、はげしい階級分化と階級闘争が発生しているソ連社会で、すべての人が、ひとりのこらずマルク

ス・レーニン主義の世界観をうけ入れた、とどうしていえるだろうか。まさか君たちのところのなん千なん万という新旧ブルジョア分子が、ことごとくマルクス・レーニン主義者であるとしてもいいのだろうか。もし君たちの論法どおりに、マルクス・レーニン主義が真に人民全体の世界観となったとしたら、社会には党と非党の区別がなくなり、党の存在の必要もまったくなくなるのではないか。どこに「全人民の党」とか、「全人民の党」でない党とかが存在する余地があるのか。

フルシチョフ修正主義集団の論法によれば、共産党の成員には労働者、農民、知識人がふくまれており、各民族と各種族がふくまれているのだから、「全人民の党」となるべきであるが、それなら、ソ連共産党第二十二回大会で「全人民の党」が提起されるまでは、ソ連共産党には労働者出身の党員だけがいて、他の階級出身の党員がいなかったとでもいうのだろうか。また、一族の党員だけがいて、他民族、他種族の党員がふくまれていなかったとでもいうのだろうか。もし、党員の社会的構成にもとづいて党の性格を確定するとすれば、世界中には各種各様の政党があり、それらの党の党員にはさまざまのちがった階級出身の人がふくまれており、さまざまのちがった民族と種族の人がふくまれているのだから、それらの党はすべて、「全人民の党」となるのではないか。

フルシチョフ修正主義集団の論法によれば、党の活動方式が民主的であるから、党は「全人民の党」である。ところが、共産党ははじめから、ほかでもなく、民主集中制にもとづいて創立されたのであり、党は人民大衆のあいだで活動するにあたっては、ゆらい、大衆路線の方法、民主的な説得教育の方法をとらなければならないのである。こうなると、共産党はすでにその創立の日から「全人民の党」となったということになるのではないか。

要するに、フルシチョフ修正主義集団のあげたこれらのさまざまな「理由」は、どれひとつとして成り立つものはないのである。

フルシチョフは「全人民の党」などと大いにわめきたてているばかりか、「生産の原則にもとづいて党の機構をうちたてる」^{④⑨}という口実で、党を「工業党」「農業党」なるものに分割したのである。

フルシチョフ修正主義集団は、かれらがこうしたのは、「社会主義の条件のもとでは経済の方が政治よりも重要である」^{④⑩}ためであり、「共産主義建設の全過程によつてもつとも重要な地位におかれている経済問題と生産問題を党組織の活動の中心とし、党組織の活動全体の第一位におく」^{④⑪}ためであるといっている。フルシチョフはいう。「われわれは卒直にいうが、党機関の仕事のなかで主要なものは生産である」^{④⑫}と。かれらはさらに、こうした観点をレーニンにおしつ

け、これはレーニンの原則にもとづいて事を運んでいるのだなどと称している。

しかし、ソ連共産党の歴史を少しでも知っている人は、これが全然レーニンの観点ではなくて、まさに反レーニン主義的観点であり、トロツキーの観点であることを知っている。この問題においても、フルシチョフはトロツキーの弟子たるに恥じないのである。

レーニンはトロツキーとブハーリンを批判したとき、「政治は経済の集中的なあらわれである」。「政治は、経済にたいして優位を占めざるをえない。これ以外の考え方をすることは、マルクス主義のイロハをわすれることを意味する」とのべ、さらに、「所与の階級は、事態にたいする正しい政治的取り扱い方をとることなしには、自分の支配を維持しえないし、またしたがって、自分の生産上の任務をも解決しえないであろう」^{④⑬}とのべたことがある。

事実はまだことに明白である。フルシチョフ修正主義集団がいわゆる「全人民の党」をもちだす真のねらいは、ソ連共産党のプロレタリア的性格を根本的にかえ、マルクス・レーニン主義の党を修正主義の党につくりかえようとするところにある。

偉大なソ連共産党はいま、プロレタリア政変からブルジョア政変に変質し、マルクス・レーニン主義政変から修正主義政変に変質するという重大な危険にさらされている。

レーニンは、「存立することを欲する党は、その存立問題にかんするどんなに小さな動揺を

も、それをほうむりかねない人びととのどんな妥協をも、ゆるすことができない」⁵⁴とのべたことがある。

現在、フルシチョフ修正主義集団は、まさにこのような重大問題を偉大なソ連共産党の広大な党員のまえにあらためてもちだしたのである。

フルシチョフのエセ共産主義

フルシチョフはソ連共産党第二十二回大会で、ソ連はすでに共産主義社会の建設を全面的に展開する時期にはいったといった。かれはまた、「二十年以内に、われわれは共産主義社会を基本的にうちたてるであろう」⁵⁵ともいった。これはまったく人をあざむくものである。

いま、フルシチョフ修正主義集団は、ソ連を資本主義復活の道にひきこみつつあり、ソ連人民は社会主義の成果をうしなう重大な危険に直面している。こうした状況のもとで、なお共産主義建設などということをして口にするのができようか。

フルシチョフは「共産主義建設」という看板をかかげているが、かれの真のねらいは、ほかでもなく、その修正主義の正体をおおいかくすことにある。だが、こうした人をあざむくカラクリ

をあばくのはなんの造作もないことである。魚の目玉を真珠だとかまかすことは許されないし、修正主義を共産主義だといつわることとは許されない。

科学的共産主義には、適確な意味がある。マルクス・レーニン主義によれば、共産主義社会とは、階級と階級差異を完全に廃絶した社会であり、全人民が高度の共産主義的自覚と道徳をそなえた社会であり、全人民が労働にたいする高度の積極性と自覚性をもっている社会であり、きわめてゆたかな社会生産物をもった社会であり、各人はその能力に応じて働き、その必要に応じて分配をうける」という原則が実行されている社会であり、国家が死滅した社会である。

マルクスはいう。「共産主義社会の高い段階で個人が分業に奴隷的に従属することがなくなり、それとともにまた頭脳労働と肉体労働の対立が消滅したのち、労働が生きるための手段であるだけでなく、それ自身第一の生活欲求となつたのち、個人の全面的な発展にもなつて生産力が増大し、協同的富のすべての源泉がいっそうゆたかにわきでるようになったのち——そのときはじめてブルジョアの権利のせまい限界を完全にふみこえることができ、社会はその旗にこう書くことができる——各人はその能力に応じて働き、その必要に応じて分配をうける」⁵⁶と。

マルクス・レーニン主義の原理によれば、社会主義社会の時期にプロレタリアート独裁を堅持するのは共産主義に向かつて発展するためにほかならない。レーニンは、「いっそうの発展、す

なわち共産主義への発展は、プロレタリアート独裁を通じておこなわれるのであって、それ以外のすすみ方はいない」⑤とのべている。フルシチョフ修正主義集団がソ連でプロレタリアート独裁を放棄した以上、それは、いっそうの発展ではなくてうしろへの後退であり、共産主義への発展ではなくて資本主義への後退である。

① 共産主義への発展とは、あらゆる階級と階級差異を一掃する方向への発展である。階級を温存する、ひいては搾取階級を温存する共産主義社会というものは絶対に考えられないのである。ところが、フルシチョフはソ連で新たなブルジョアジーを育成し、搾取制度を復活、発展させ、階級分化を激化させている。ソ連人民に対立するブルジョア特権階級は、すでに党、政府、経済、文化などの部門で支配的地位を占めているのである。これでは、どこにも共産主義のひとかけらさえ見受けられないではないか。

② 共産主義への発展とは、単一の生産手段の全人民的所有制の方向への発展である。多種類の生産手段所有制が同時に存在する共産主義社会というものは絶対に考えられないのである。ところが、フルシチョフは、全人民的所有制の企業を一步一步と資本主義的性格の企業に変質させ、集団的所有制のホルホーズを一步一步と富農経済に変質させている。これではまた、どこにも共産主義の影さえ見受けられないではないか。

③ 共産主義への発展とは、社会生産物がきわめてゆたかになり、「各人はその能力に応じて働き、その必要に応じて分配をうける」ということを実現する方向への発展である。共産主義社会がひとにぎりのものの裕福、広はんな人民大衆の貧困を土台としてうたてられるようなことは絶対に考えられないのである。偉大なソ連人民は社会主義制度のもとで、史上例を見ない速度で社会生産力を発展させた。しかし、フルシチョフ修正主義にわざわいされて、ソ連の社会主義経済はゆゆしい破壊をこうむった。フルシチョフはつねに、かずかずの矛盾にとりかこまれてあがいており、かれの経済政策はいつも朝令暮改で常なきものであり、ソ連の国民経済をひどい混乱におとし置いている。フルシチョフはどうにもならない放蕩息子である。かれはスターリン時代に貯えた予備食糧をすっかり使いはたし、ソ連人民の生活に重大な困難をもたらした。かれは、「各人はその能力に応じて働き、その労働に応じて分配をうける」という社会主義の分配原則をねじまげ、破壊して、ひとにぎりのものに広はんソ連人民の労働の成果を横領させた。この面からいっても、フルシチョフのあゆんでいる道は共産主義に逆行するものである。

④ 共産主義への発展とは、人民大衆の共産主義的自覚を高める方向への発展である。ブルジョア思想がはらんするような共産主義社会は絶対に考えられない。ところが、フルシチョフはソ連でブルジョア思想を復興させることに熱中し、そのうえ、アメリカの腐敗した文化の宣教師にな

りさがっている。かれは物質による刺激を宣伝し、人と人との関係をみな金銭関係にかえ、個人主義と私利私欲の思想を發展させている。かれは肉体労働をふたたび卑しいこととみなされるようにし、そして他人の労働の成果を横取りする基礎のうえに築かれた享樂をふたたび光榮なものとみなされるようにした。フルシチョフの提唱するこうした社会的道徳と氣風は、共産主義とはまったくかけはなれている。

⑤ 共産主義への發展とは、国家が死滅する方向への發展である。人民を抑圧する国家機構の存在するような共産主義社会は絶対に考えられないのである。プロレタリアート独裁の国家はもともと、本来の意味における国家ではない。なぜなら、それはすでに少数の搾取者が圧倒的多数の人民大衆を抑圧する機構ではなくて、圧倒的多数の人民大衆が民主主義を享受し、ごく少数の搾取者にたいしてだけ独裁を實行する機構であるからである。フルシチョフはソ連の国家権力のもつプロレタリアート独裁の性格をかえ、国家をふたたびひとにぎりのブルジョア特権階層がソ連の広はんな労働者階級、農民、知識人にたいして独裁を實行する道具にかえつつある。現在、フルシチョフはかれの独裁専制の国家機構をひきつづき強化し、ソ連人民にたいする弾圧を強化しつつある。こうした状況のもとで、共産主義などというものをとやかくいうのは、まったくこのうえもない皮肉である。

科学的共産主義の原理にてらしてみさえすれば、つぎのことは見いだすのは容易である。つまり、どの面からいっても、フルシチョフ修正主義集団はソ連を社会主義の軌道から離脱させ、資本主義の軌道にのせており、そのため、ソ連を「各人はその能力に応じて働き、その必要に応じて分配をうける」という共産主義の目標にますます近づけるのではなく、ますます遠ざけているのである。

フルシチョフが共産主義の看板をおしたてているのには、人にいえない悪意がかくされている。かれはこの看板を利用してソ連人民をあざむき、資本主義の復活をおおいかくしている。かれはまた、この看板を利用して、国際プロレタリアートと全世界の革命的人民をあざむき、プロレタリア国際主義を裏切っている。この看板にかくれて、フルシチョフ一味は自分たちがプロレタリア国際主義の義務を放棄し、アメリカ帝国主義とグルになって世界を分割することを追求している。そればかりか、さらに社会主義の兄弟国をその私利私欲にしたがわせ、かれらに帝国主義に反対することをゆるさず、被抑圧人民と被抑圧民族の革命への支持をゆるさず、かれらを政治、経済、軍事の面でその指図にしたがわせ、事実上、フルシチョフ一味の従属国と植民地に交えようとしている。フルシチョフ一味はまた、全世界の被抑圧人民と被抑圧民族をその私利私欲にしたがわせ、かれらに、革命闘争を放棄し、フルシチョフ一味が帝国主義とグルになって世界

を分割するというあまい夢のじゃま立てをせず、帝国主義とその手先による奴隷化と分割に身をまかせよう要求している。

要するに、フルシチョフのもちだした、ソ連で「二十年以内に共産主義を基本的にきずきあげ」というスローガンは、欺瞞的なものであるばかりか、反動的なものである。

フルシチョフ修正主義集団は、中国人は「こともあろうに、わが党、わが国人民の共産主義建設の権利に疑いをいだいている」^⑧といっている。ソ連人民をあざむき、中ソ両国人民の友宜を離間するこうした手口はきわめて拙劣なものである。われわれはこれまで、偉大なソ連人民がいつかは共産主義社会にはいるだろうということに疑いをもつたことはなかった。しかし、いまでは、フルシチョフ修正主義集団はソ連人民の社会主義の成果をうちこわし、ソ連人民の共産主義へ前進する権利を奪いとつている。こうした状況のもとで、ソ連人民のまえによこたわっている課題は、どのようにして共産主義を建設するかということではなくて、どのようにしてフルシチョフによる資本主義復活の実現に反対し、それをくいとめるかということである。

フルシチョフ修正主義集団はまた、「中国共産党の指導者は、わが党が人民のために幸福な生活をかちとることをみずからの任務とする」と宣言したのをとりあげて、ソ連社会における種の「ブルジョア化」と「変質」をほのめかしている^⑨といっている。かれらにたいするソ連人

民の不満をそらすこうした手口は愚かなものであり、あわれむべきものである。われわれは、ソ連人民の生活が日ましに幸福になるよう心から願っている。しかし、フルシチョフのさかんに吹聴している「人民の福祉に関心をもつ」とか、「どの人にも幸福な生活をおくらせる」とかは、まったくニセものであり、人をあざむくものである。広はんソ連人民の生活は、フルシチョフのために痛めつけられて、たいへん苦しくなっている。フルシチョフ一味の追求しているのは、ソ連の特権階級分子、新旧ブルジョア分子の「幸福な生活」だけである。これらのものはソ連人民の労働の成果を横領し、ブルジョアのな巨那生活をおくっている。かれはまぎれもなくかけねなしのブルジョア化をとげたのである。

フルシチョフの「共産主義」は本質的には、ブルジョア社会主義の一変種である。かれは、共産主義を階級と階級差異を完全に一掃するものとみなすのではなく、それを「すべての人がとることのできる、肉体労働と頭脳労働の生産物をいっばいに盛りあげた食事である」^⑩などといっている。かれは、共産主義をめざす労働者階級の闘争を自己と全人類の完全な解放をめざす闘争とみなすのではなく、それを一皿の「シチュー料理」のための闘争であるなどといっている。フルシチョフの頭のなかには、科学的共産主義など影も形もなく、あるのはもっぱらブルジョアの俗物の社会である。

フルシチョフの「共産主義」はアメリカを手本とするものである。かれはアメリカの資本主義的経営方式とブルジョア的生活様式に学ぶことを国策の地位にまで高めた。かれはアメリカの成果を「非常に重要視している」といい、「これらの成果のために喜びをおぼえ、ときには少々うらやましくも思っている」^⑭といっている。かれは、資本主義制度をさかんに宣伝しているアメリカの大農場主ガールストの手紙を大にもちあげ^⑮、事実上、この手紙を農業の面における自分の綱領としている。かれは農業の面でアメリカに学ぶうとしていたばかりか、工業の面でもアメリカに学ぶうとしており、とくにアメリカの資本主義的企業の利潤の原則に学ぶうとしている。かれはアメリカ人の生活様式をひどくうらやんでおり、独占資本の支配と奴隷化のもとにあるアメリカ人民が「結構な生活をおくっている」^⑯といはっている。かれはまた、アメリカ帝國主義の借款で共産主義を建設しようと望んでいる。フルシチョフはまた、アメリカとハンガリーを訪問したさい、再三にわたって、「悪魔のところから金を借り」たいのだ、と表明した。

以上によつて明らかのようにフルシチョフの「共産主義」とは、つまり「シチュー料理の共産主義」であり、「アメリカ的生活様式の共産主義」であり、「悪魔から金を借りる共産主義」である。フルシチョフがつねづね西側独占ブルジョアジートの代表的人物にたいして、いったんこのような「共産主義」が実現されれば、「わたしが呼びかけなくても、あなたがたは共産主義へ

すすんでいくでしょう」^⑰といっているのも、なんら怪しむにたらない。

このような「共産主義」はなにもめずらしくはない。このような「共産主義」は資本主義の代名詞にすぎない。このような「共産主義」は、ブルジョアジートの一種の商標、看板、広告にすぎない。レーニンは、旧修正主義政党がマルクス主義の看板をかかげているのを嘲笑して、「このような『ブルジョアの労働者政党』は、マルクス主義が労働者の歓迎をうけているところでは、どこでもマルクスの名をもちだして誓いをたてるものである。かれらがこのようにするのを禁止することはできない。それは、ちょうどある商店がどんな商標、看板、広告を使用しようと、これを禁止できないのと同様である」^⑱とのべたことがある。

こうして、フルシチョフの「共産主義」がなぜ帝國主義と独占ブルジョアジートのおほめにあずかるかが、きわめて容易に理解される。アメリカのラスク國務長官はこう語っている。「『シチュー料理』や着替えのズボン、こうしたたぐいの問題がソ連でよりいっそう重要となるにともなつて、当面の舞台には温和な役割を果たす勢力があらわれたと、わたしは考える」^⑲と。ヒューム・イギリス首相もこのべている。「フルシチョフ氏はまた、ロシア印の共産主義は教育とシチュー料理を第一義とするといったことがある。これはまことに結構なことだ。シチュー料理の共産主義は戦争の共産主義よりはましである。さらによろこばしいことは、これが肥った、楽な

生活をおくっている共産主義者の方が、やせおとろえ、飢餓にさいなまれた共産主義者よりもまだ、とするわたしの見解を裏証したことである」⁽⁷⁷⁾と。

フルシチョフの修正主義は、ソ連その他の社会主義国にたいして「平和的転化」の政策をおしすすめているアメリカ帝国主義の要求を完全にみたしている。ダレスはいう。「ソ連の内部には、かなり幅のひろい自由主義を要求する勢力が存在していることを示す形跡がある。もしこうした勢力があくまで存在しつづけるならば、ソ連の内部に基本的な変化をおこさせる可能性がある」⁽⁷⁸⁾と。ダレスのいう自由主義勢力とは、ほかでもなく資本主義勢力である。ダレスの望む基本的変化とは、ほかでもなく社会主義から資本主義への退化である。いま、フルシチョフはダレスが夢にも忘れたことのない「基本的変化」を実現しつつあるのである。

みたまえ、ソ連における資本主義の復活にたいして、帝国主義がどんなに大きな望みをかけていることか！ かれらがどんなに有頂天になっていることか！

われわれは帝国主義の旦那がたに、よろこぶのはちよつとまちたまえ、とおすすめる。フルシチョフ修正主義集団がきみたちに奉仕しているとはいえ、帝国主義を必然的滅亡の運命から救いだすことは、けつしてできないのである。修正主義の支配集団と帝国主義の支配集団は同じ病気にかかっている。それはつまり、人口の九〇パーセント以上を占める人民大衆と両立しない立

場に立っており、したがって、かれらは同じようにきわめてひ弱く、無力なのであり、同じようにハリコの虎なのである。フルシチョフ修正主義集団は泥でこねた仏さまの川渡りのようなもので、自分じしんの安全さえ保証しがたい、それなのに、どうしてまた帝国主義の不老長寿をまもらえようか。

プロレタリアート独裁の歴史的教訓

フルシチョフ修正主義は、国際共産主義運動に重大な損害をもたらしたが、同時にまた、全世界のマルクス・レーニン主義者と革命的人民に逆の面からの教育をおこなった。

偉大な十月革命が各国のマルクス・レーニン主義者にもっとも重要な正面からの経験を提供し、プロレタリアートが権力を奪取するための道をきりひらいたとするなら、フルシチョフ修正主義は逆にもっとも重要な逆の面からの経験を提供了のであって、各国のマルクス・レーニン主義者はそのなかから、プロレタリア政党と社会主義国家の墮落変質をふせぐ教訓をくみとることができるといえる。

世界各国の歴史上の革命にはすべて、反復と曲折があった。レーニンも、「問題の本質をとり

あげてみるならば、新しい生産様式が、ひきつづく幾多の失敗と誤りと逆転をともなわないで一
 気に根づくことが、はたして歴史上にあつたらうか^⑧とのべている。

国際プロレタリア革命の歴史は、一八七一年パリ・コンミュニョンのプロレタリアートが権力を
 奪取した最初の英雄的な試みからかぞえて、まだ一世紀にもみたくない。十月革命から現在まで
 は、まだ半世紀にもみたくない。プロレタリア革命は社会主義を資本主義にとつてかわらせ、共有
 制を私有制にとつてかわらせ、搾取制度と搾取階級を根本的になくするものであつて、これは人
 類史上のもつとも偉大な革命である。このような天地をくつがえす革命は、当然のこととして、
 なおさらまぎびしい激烈な階級闘争を経なければならず、どうしても長期にわたる、反復、曲折の
 過程を経なければならぬ。

史上、プロレタリア権力がブルジョアジーの武力弾圧をうけて失敗をなめたことについては、
 すでにパリ・コンミュニョンの例があり、一九一九年のハンガリー・ソビエト共和国の例がある。
 こんにちも、一九五六年にハンガリーの反革命暴動がおこつて、プロレタリア権力は危くくつが
 えされるところだつた。こうしたかたちの資本主義の復活にたいしては、人びとは容易にこれを
 見てとることができ、わりに注意もし、比較的警戒もしている。

ところが、いまひとつのかたちの資本主義の復活にたいしては、人びとは往々にして容易にこ
 れを見てとることができず、往々にして注意をせず、往々にして警戒もしていない。したがつ
 て、その危険性もいっそう大きいわけである。それはつまり、プロレタリアート独裁の国家が、
 党と国家の指導部の墮落変質によつて修正主義の道をあゆみ、いわゆる「平和的転化」の道を歩
 むばあいにはかならない。チトー修正主義集団はユーゴスラビアを社会主義国家から資本主義国
 家に墮落変質させて、とつくにこうした教訓を提供している。しかし、ユーゴスラビアの教訓だ
 けでは、まだ人びとに十分のことを重視させるまでにはゆかない。それはたぶん偶然の出来事
 だろうと、人びとがいかうかもしれない。

ところが、いま、偉大な十月革命の故郷、数十年にのぼる社会主義建設の歴史をもつソ連に
 も、フルシチョフ修正主義集団が党と国家の指導部をのつとるといふ事件がおこり、資本主義復
 活のゆゆしい危険があらわれたのである。このことは、わが中国をもふくむすべての社会主義
 国、中国共産党をもふくむすべての共産党、労働者党にたいして警鐘をうちならすものである。
 このことは、人びとの大きな注意をひかないわけにはゆかないし、全世界のマルクス・レーニン
 主義者と革命的人民の真剣な考慮と嚴重な警戒をうながさないわけにはゆかない。

フルシチョフ修正主義があらわれたのは、わるいことではあるが、よいことでもある。フルシ
 チョフ修正主義集団がソ連で「平和的転化」をすすめている教訓を真剣に検討し、それ相應の措

置をとるなら、すでに勝利をかちとった社会主義国家やがて社会主義の道に歩みいる国家は、敵の武力攻撃をうちやぶりうるばかりでなく、「平和的転化」をもふせぐことができる。そうすれば、プロレタリア世界革命の勝利はなおさら確かなものとなるだろう。

わが中国共産党はすでに四十三年の歴史をもっている。わが党は長期にわたる革命闘争のなかで、右翼日和見主義のあやまちに反対するとともに、「左」翼日和見主義のあやまちにも反対し、毛沢東同志をはじめとする党中央のマルクス・レーニン主義的指導を確立してきた。毛沢東同志はマルクス・レーニン主義の普遍的真理を中国の革命と建設の具体的実践にしっかりとむすびつけ、中国人民を指導してつぎつぎに勝利をおさめてきた。中国共産党中央委員会と毛沢東同志は、理論、政策、組織の面でも、具体的な仕事の面でも、修正主義に反対し、資本主義の復活をふせぐ闘争をうまずたゆまずつづけてゆくべきことをわれわれにおしえている。中国人民は長期にわたる革命の武装闘争を経てきており、光栄ある革命的伝統をもっている。中国人民解放軍は毛沢東思想で武装した軍隊であり、人民大衆と骨肉のつながりをもっている。中国共産党の広はん幹部は、たびたびの整風運動と鋭い階級闘争を経て、教育と鍛練をうけている。こうした条件はすべて、わが国における資本主義の復活をかなり困難にしているのである。

しかし、われわれはたしかめてみなければならない。当面のわれわれの社会は、はたして一点のけがれもない清らかなものであるかどうか。いや、決してそれほど清らかではない。そこにはいまなお階級と階級闘争が存在し、うちたおされた反動階級の復活をたくらむ活動が存在し、新旧ブルジョア分子の投機活動が存在し、汚職・窃盗分子と墮落変質分子のきちがいじみた攻撃が存在している。ほんのいちぶの末端部にも墮落変質の現象がおこっているほか、これらの墮落変質分子はまた極力、上級指導機関の中にかねらの保護者と代理人をさがしとめている。こうした現象にたいして、われわれはいささかも気をゆるしてはならず、十分な警戒心をもたなければならぬ。

社会主義国家において、社会主義と資本主義という二つの道の闘争、資本主義勢力が復活をたくらむことと、資本主義の復活に反対することとの闘争は、さけられないものである。しかし、社会主義国家で資本主義が復活し、社会主義国家が資本主義国家に墮落するのはさけられないことである、とは決していえない。われわれが正しい指導をもち、この問題を正しく認識し、マルクス・レーニン主義の革命的路線を堅持するとともに、正しい措置を講じて、長期にわたり、うまずたゆまず闘いぬきさえすれば、資本主義の復活はふせぐことができる。社会主義と資本主義という二つの道の闘争は、社会をいっそう発展させる原動力となりうるのである。

では、どのようにしたら資本主義の復活をふせぐことができるのか？ この問題のうえで、毛

沢東同志はマクルス・レーニン主義の基本原理にもとづいて、中国におけるプロレタリアート独裁の実験的経験を総括し、また國際的な経験、おもにソ連の正面と逆の面からの経験を検討して、体系的な理論と政策を提起し、それによってプロレタリアート独裁にかんするマクルス・レーニン主義の学説をゆたかにし、発展させた。

毛沢東同志がこの面で提起した理論と政策のおもな内容はつぎのとおりである。

第一、マルクス・レーニン主義の対立物の統一の法則にもとづいて社会主義社会を觀察しなければならぬ。事物の矛盾の法則、つまり対立物の統一の法則は、唯物弁証法のもつとも根本的な法則である。この法則は自然界、人類社会、人間の思想のいずれにもあまねく存在する。矛盾する対立面は統一しながらも闘争し、これによって事物の運動と変化をうながす。社会主義社会も例外ではない。社会主義社会には、人民内部の矛盾と敵味方の矛盾という二種類の社会的矛盾が存在する。この二種類の社会的矛盾は性質がまったくちがっているため、処理する方法もちがっていないなければならない。この二種類の社会的矛盾を正しく処理すれば、プロレタリアート独裁は日まじしに強まり、社会主義社会は日まじしに強まり、発展するであろう。多くの人は、対立物の統一の法則を認めるが、この法則を応用して社会主義社会の諸問題を觀察し、処理することができない。かれらは、社会主義社会には矛盾があることを認めないし、社会主義社会に敵味方

対立物の統一の法則

社会主義社会

矛盾

の矛盾があるばかりでなく、人民内部の矛盾もあるのだということを認めない。また、この二種類の社会的矛盾を正しく區別し、正しく処理することもわからない。これでは、プロレタリアート独裁の問題を正しく処理することもできないのである。

第二、社会主義社会はひじょうに長い歴史的段階である。社会主義社会にはまだ階級と階級闘争が存在し、社会主義と資本主義という二つの道の闘争が存在する。経済戦線における（生産手段の所有制における）社会主義革命だけでは十分でなく、また強固でもない。そのほかに、政治戦線と思想戦線における徹底した社会主義革命がどうしても必要である。政治、思想の領域では、社会主義と資本主義のあいだの誰が誰に勝つかの闘争は、ひじょうに長い時間をかけなければ解決することができない。数十年ではためであって、百年から数百年の時間をかけなければ、成功できるものではない。時間の問題については、短いつもりでいるよりも、むしろ長い心がまえをしておく方がよい。仕事の問題については、楽なことだと考えるよりも、むしろむずかしいことだと考えておく方がよい。このように考え、このようにするならば、比較的有益であり、比較的損失がすくなくなる。もしもこのような情勢にたいして認識がたりないか、あるいは根本的に認識していないならば、ひじょうに大きな誤りをおかすことになるだろう。社会主義というこの歴史的段階では、かならずプロレタリアート独裁を堅持し、社会主義革命を最後までやりぬかね

思想戦線の徹底

数百年かかる

はならず、そうしなければ、資本主義の復活をせせき、社会主義建設をすすめ、共産主義に移行するための条件をととのえることができない。

第三、プロレタリアート独裁は労働者階級が指導するものであり、労農同盟を基礎とするものである。プロレタリアート独裁とは、労働者階級とその指導のもとにある人民が、反動階級、反動派、社会主義的改造と社会主義建設に反抗する連中にたいして独裁をおこなうことにほかならない。人民の内部では民主集中制を実行する。われわれのこうした民主主義は、いかなるブルジョア国家にもありえないもつとも広はん民主主義である。

第四、社会主義革命と社会主義建設には、かならず大衆路線を堅持し、思いきって大衆を立ちあがらせ、大いに大衆運動をおこななければならない。「大衆のなかから、大衆のなかへ」という大衆路線は、わが党のあらゆる活動の根本路線である。だんことして大衆の大多数を信じ、まづもって労農基本大衆の大多数を信じなければならない。大衆と相談して物事を処理することに長じていなければならない。どんなばあいにも大衆から離れてはならない。命令主義や恩寄せがましい観点には反対する。わが国の人民が長期にわたる革命闘争のなかでつくり出した、大いに意見をのべあい、大いに討論しあうやりかたは、人民大衆にたよって人民内部の矛盾や敵味方の矛盾を解決する一つの重要な革命闘争の方式である。

第五、社会主義革命でも、社会主義建設でも、誰に依拠し、誰を獲得し、誰に反対するかという問題を解決しなければならない。プロレタリアートとその前衛はかならず社会主義社会を階級的に分析して、だんこ社会主義の道をあゆむ真にたよりとなる勢力に依拠し、獲得できるすべての同盟者を獲得し、人口の九五パーセント以上をしめる人民大衆と団結して、ともに社会主義の敵にあたらなければならない。農村では、農業集団化ののちも、貧農、下層中農に依拠しなければならない。そうしなければ、プロレタリアート独裁をうちかためることができず、労農同盟をうちかためることもできず、自然発生的な資本主義勢力を打ちやぶることもできず、そしてまた社会主義の陣地をたえずうちかため、おしひろげることのできないのである。

第六、都市と農村のいたるところで社会主義教育運動をくりかえしおこなわなければならない。たえまなく人を教育するこの運動のなかでは、革命の階級的隊列を組織し、かれらの階級意識をたかめ、人民内部の矛盾を正しく処理し、団結できるすべての人びとと団結することに長じていなければならない。この運動のなかでは、社会主義を敵視する資本主義勢力と封建勢力にたいし、地主、富農、反革命分子、ブルジョア右派分子にたいし、汚職・窃盗分子と堕落愛質分子にたいして、まっとうから対決する激しいたたかいをすすめ、社会主義にたいするかれらの攻撃をうちやぶり、かれらのうちの大多数のものを新しい人間に改造してゆかなければならない。

敵を

教育

〔第七〕プロレタリアート独裁の基本任務のひとつは社会主義経済の発展につとめることである。農業を基礎とし、工業を導き手とする国民経済発展の全般の方針の指導のもとに、工業、農業、科学・技術、国防の現代化を一步一步なしとげなければならない。生産の発展を基礎として、人民大衆の生活を一步一步普遍的に改善していかなければならない。

〔第八〕全人民的所有制の経済と集団的所有制の経済は社会主義経済の二つの形態である。集団的所有制から全人民的所有制に移行し、二つの所有制から単一の全人民的所有制に移行するには、相当に長い発展過程がなければならない。集団的所有制じたいにも、低い段階から高い段階へ、小規模のものから大規模のものへと発展する過程がある。中国人民がつくり出した人民公社は、この移行の問題を解決する一種の適切な組織形態にはかならない。

〔第九〕百花齊放、百家争鳴の方針は芸術の発展と科学の進歩をうながす方針であり、社会主義的文化の繁栄をうながす方針である。教育はプロレタリアートの政治に奉仕し、生産的労働と結びつかなければならない。勤労人民は知識化を必要とし、知識人は労働化を必要とする。科学、文化、芸術、教育の隊列のなかで、プロレタリア思想をおこし、ブルジョア思想をほろぼすことも、これまた、長期にわたる激しい階級闘争である。われわれは文化革命を通じ、階級闘争、生産闘争、科学実験の革命的実践を通じて、政治的な自覚も高ければ専門的な知識もゆたかな、社

文化革命

教育

百花齊放

百家争鳴

人民公社

所有制

全人民所有

各業

会主義のために奉仕する、広はんな労働者階級の知識人の隊列をうちたてなければならない。

〔第十〕幹部が集団的な生産的労働に参加する制度を堅持しなければならない。わが党と国家の幹部は普通の勤労者であつて、人民の頭上へのさばる旦那ではない。幹部は集団的な生産的労働への参加を通じて、勤労人民ともつとも広はんで、經常的な、密接な関係を保持する。これは社会主義制度のもとで根本的な意味をもつ大きな問題である。それは、官僚主義を克服し、修正主義と教条主義を防止するのに役だつ。

〔第十一〕少数のものに高給をあたえる制度をせつたいに実施してはならない。党、国家、企業、人民公社の勤務人員と人民大衆とのあいだの個人所得の格差は、合理的に一步一步縮小すべきであり、拡大すべきではない。すべての勤務人員が職権を利用していかなる特権を享受することも防止すべきである。

〔第十二〕社会主義国の人民武装部隊は、永遠にプロレタリア政党的指導と人民大衆の監督を受け、永遠に人民の軍隊の光栄ある伝統を保持し、軍隊と人民が一体となり、将校と兵士が一体とならなければならない。将校が兵士になる制度を堅持しなければならない。軍事上の民主主義、政治上の民主主義、経済上の民主主義を實行しなければならない。また、いたるところで民兵を組織し、訓練し、全民皆兵の制度を実施すべきである。鉄砲は永遠に党と人民の手中にきつて

人民の光栄

人民の光栄

仙人所得の格差をなくす

生産的労働への参加

修正主義

官僚主義

修正主義

修正主義

修正主義

修正主義

修正主義

修正主義

修正主義

修正主義

修正主義

修正主義

修正主義

修正主義

修正主義

修正主義

修正主義

「第十三、人民公安機関は永遠にプロレタリア政党的指導と人民大衆の監督をうけなければならない。社会主義の成果と人民の利益をまもるたたいのなかでは、広はんな人民大衆にたよることと、専門の機関にたよることをむすびつける方針をとり、悪人は一人も逃がさず、よい人には一人も無実の罪をさせないようにしなければならぬ。反革命があればかならず肅清し、誤りがあればかならず是正する。」

「第十四、対外政策の面では、プロレタリア国際主義を堅持し、大国排外主義と民族利己主義に反対しなければならぬ。社会主義陣営は国際プロレタリアートと勤労人民のたたいによつて生み出されたものである。社会主義陣営は社会主義諸国の人民のものであるばかりでなく、国際プロレタリアートと勤労人民のものである。「万国の労働者、団結せよ」、「全世界のプロレタリアと被抑圧民族は団結せよ」という戦闘的スローガンを真に実行し、帝国主義と各国反動派の反共、反人民、反革命の政策にだんこ反対し、全世界の被抑圧階級と被抑圧民族の革命闘争を援助しなければならぬ。社会主義諸国間の関係は、自主独立、完全平等とプロレタリア国際主義の相互支持、相互援助の原則の基礎のうえにうちたてられなければならない。どの社会主義国の建設事業も、おもに自力更生にたよるべきである。もしも社会主義国が対外政策の面で民族的

利己主義をとり、ひいては帝国主義とグルになつて世界の分割に熱中するなら、それは墮落衰質して、プロレタリア国際主義を裏切るものである。

「第十五、プロレタリアートの前衛としての共産党は、かならずプロレタリアート独裁とともに存在しなければならない。共産党はプロレタリアートの最高の組織形態である。プロレタリアートの指導的役割は、ほかでもなく共産党の指導を通じて実現されるものである。すべての部門のなかで、党委員会が指導をおこなう制度を実行しなければならない。プロレタリアート独裁の時期には、プロレタリア政党的指導はプロレタリアートおよび広はんな勤労大衆との密接な結びつきをたもち、発展させ、その生氣にあふれた革命的作風をたもち、発揚させ、マルクス・レーニン主義の普遍的真理と自国の具体的実践とを結びつける原則を堅持し、修正主義に反対し、教条主義に反対し、あらゆる日和見主義に反対する闘争をあくまでつづけなければならない。」

プロレタリアート独裁の歴史的教訓にもとづいて、毛沢東同志はこう指摘している。「階級闘争、生産闘争、科学の実験は、強大な社会主義国を建設するための三つの偉大な革命運動であり、それは共産主義者が官僚主義をのぞき、修正主義と教条主義をまぬがれ、永遠に不敗の地に立つしっかりした保証であり、また、プロレタリアートが広はんな勤労大衆と結びつき、民主主義独裁を実行することのできたしかな保証である。さもなくば、地主、富農、反革命分子、

悪質分子、さまざまの妖怪へんげのたぐいがいつせいにとびだしてくるだろう。そして、われわれの幹部がそれを意に介さず、多くのものがひどい場合には敵味方の区別がつかず、互いに結託し、敵によってむしろ生まれ、分化、瓦解させられ、ひきずり出され、もぐりこまれ、さらに多くの労働者、農民、知識人もまた敵の懐柔、強硬の二つの手ぐちののってしまうなら、それほど長い期間がたたなくても、つまり短くて数年、十数年、長くて数十年もたてば、不可避免的に全国的規模な反革命の復活があらわれ、マルクス・レーニン主義の党は修正主義の党にかわり、ファシスト党にかわり、中国せんたいが変色するにちがいない」^⑩ど。

毛沢東同志は、われわれの党と国家が変色しないよう保証するためには、われわれは正しい路線と政策を必要とするばかりか、プロレタリア革命事業のいく百千万の後継者を育成し、養成することが必要である、と指摘している。

プロレタリア革命事業の後継者を育成する問題は、根本的にいえば、つまり古い世代のプロレタリア革命家が創業したマルクス・レーニン主義の革命事業をうけつぐ人がいるかどうかの問題であり、将来われわれの党と国家の指導がひきつづきプロレタリア革命家の手中ににぎられるかどうかの問題であり、われわれの子々孫々がマルクス・レーニン主義の正しい道にそって前進をつづけるかどうかの問題であり、また、われわれが中国におけるフルシチョフ修正主義の再

演を勝利のうちに防止しうるかどうかの問題である。要するに、これはわれわれの党と国家の運命にかかわる、生きるか死ぬかのきわめて重大な問題である。これはプロレタリア革命事業の百年の大計であり、千年の大計であり、万年の大計である。帝国主義の予言者たちは、ソ連でおこった変化を根拠にして、「平和的転化」の望みを中国の党の第三代目あるいは第四代目の党员にかけている。われわれはかならず帝国主義のこうした予言を完膚なきまでに破産させなければならない。われわれはかならず、上から下まで、いたるところで、恒常的に、革命事業の後継者を育成し、養成することに心をくばらなければならない。

どんな条件をそなえれば、プロレタリア革命事業の後継者となることができるのだろうか。プロレタリア革命事業の後継者は、真のマルクス・レーニン主義者でなければならない。フルシチョフのようなマルクス・レーニン主義の看板をかかげた修正主義者であってはならない。

そうした後継者は一意専心中国と世界の圧倒的多数の人びとに奉仕する革命家でなければならず、フルシチョフのように、国内ではひとにぎりのブルジョア特権階級の利益に奉仕し、国際的には帝国主義と反動派の利益に奉仕するのであつてはならない。

そうした後継者は、圧倒的多数の人びとと団結し、かれらとともに仕事のできるプロレタリア政治家でなければならない。自分と意見の同じ人びとと団結しなければならぬばかりか、自分

と意見のちがう人びともりつぱに団結しなければならず、また、自分に反対したことがあり、あやまちを犯したことが実践によって立証された人びともりつぱに団結しなければならぬ。しかし、フルシチョフのような個人的野心家や陰謀家にはとくに警戒し、このような悪人が党和国家の各級指導部をのつとることを防止しなければならない。

そうした後継者は、党の民主集中制を模範的に実行する者でなければならず、「大衆のなかから、大衆のなかへ」という指導方法を習得しなければならず、よく大衆の意見に耳を傾ける民主的な作風をりつぱに養成しなければならない。フルシチョフのように、党の民主集中制をふみにじり、勝手きままにふるまい、同志にたいして突然攻撃をくわえ、いつさいの道理を無視し、個人独裁を実行するようなことは許されない。

そうした後継者は、謙虚でつつしみぶかく、おごりやあせりを戒め、自己批判の精神にとみ、自分の仕事のなかの欠点やあやまちをあらためるのに勇敢でなければならない。フルシチョフのように、自分のあやまちをひたかくしにし、いつさいの功績を自分のものにし、いつさいのあやまちを他人におしつけるようなことをしてはならない。

プロレタリア革命事業の後継者は、大衆闘争のなかから生まれるものであり、革命のはげしいあらしに鍛えられて成長するものである。長期にわたる大衆闘争のなかで、幹部を考察、識別

し、後継者をえらびだし、養成しなければならない。

毛沢東同志の提起した以上の一連の原則は、マルクス・レーニン主義を創造的に発展させ、マルクス・レーニン主義の理論の宝庫に新しい武器をつけ加えた。このような武器は、われわれが資本主義の復活を防止するのに決定的な意義をもっている。これらの諸原則にもとづいてことをはこぶかぎり、プロレタリアート独裁をうちかため、われわれの党と国家を永遠に変色させず、社会主義革命と建設を順調にすすめ、帝国主義とその手先を打倒する世界各国人民の革命運動に援助をあたえ、さらに将来社会主義から共産主義への移行を保証することができるのである。

*

*

*

ソ連にフルシチョフ修正主義集団があらわれたことについて、われわれマルクス・レーニン主義者の態度は、すべての「騒乱」にたいする態度とおなじく、第一には反対し、第二には恐れ

ない、ということである。
 われわれがそれをのぞまず、それに反対しているにもかかわらず、フルシチョフ修正主義集団はすでにあらわれてしまったのである。だが、それはなにもおそれることではないし、あれこれおどろいたり、不思議がったりするにはあたらない。地球はやはりこれまでどおり回転をつつ

け、歴史はやはりいつそう発展する。全世界人民はかならず革命をおこない、帝国主義とその手先はかならず滅亡するのである。

偉大なソ連人民の歴史的功績は千年万年ののちまでも照りがやくものであり、フルシチョフ修正主義集団の裏切りによって精彩をうしなうようなことは絶対でない。ソ連の広はんな労働者、農民、革命的知識人、広はんなソ連の共産主義者は、いつかは前進途上のすべての障害をのりこえ、共産主義をめざしてつき進むことである。

ソ連人民、社会主義諸国の人民、全世界の革命的人民は、かならずフルシチョフ修正主義集団の裏切りのなから有益な教訓をくみとることである。国際共産主義運動は、フルシチョフ修正主義に反対する闘争を通じて、すでにこれまでのいかなる時にもまして強大なものとなつたし、またひきつづき強大なものとなるであらう。

マルクス・レーニン主義者はゆらい、プロレタリア革命事業の前途にたいして革命的な楽天主義の態度をとっている。プロレタリアート独裁の光、社会主義の光、マルクス・レーニン主義の光は、必ずあまねくソビエトの大地に照りがやくことであらう、われわれはそれを確信している。プロレタリアートはかならず全世界をかちとるであらうし、共産主義はかならず地球上で完全な、徹底的な、最後の勝利をかちとるにちがいない。

64.10.30

注

- ① マルクス「ゴータ綱領批判」、『マルクス・エンゲルス選集』第一二巻上
- ② 「国家と革命」、『レーニン全集』第二五巻
- ③ 同右
- ④ 「プロレタリア革命と背教者カウツキー」、『レーニン全集』第二八巻
- ⑤ 「ハンガリーの労働者へのあいさつ」、『レーニン全集』第二九巻
- ⑥ マルクス「イ・ウイトンメルヘ」、『マルクス・エンゲルス二巻選集』第二巻
- ⑦ マルクス「ゴータ綱領批判」、『マルクス・エンゲルス選集』第一二巻上
- ⑧ マルクス「フランスにおける階級闘争一八四八年から一八五〇年まで」
- ⑨ 「演説『自由と平等のスローガンによる人民の欺瞞について』の出版のさいの序文」、『レーニン全集』第二九巻
- ⑩ 「共産主義内の『左翼主義』小児病」、『レーニン全集』第三一巻
- ⑪ スターリン「ソ同盟憲法草案について」
- ⑫ スターリン「ソ同盟共産党（ボルシェビキ）中央委員会の活動に関する第十八回党大会における報告

演説

- ⑬ 一九六二年五月十九日づけのソ連『クラスナヤ・ズベズダ』紙
- ⑭ 一九六三年十月八日づけのソ連『ブラウダ・バストーカ』紙
- ⑮ 一九六二年五月十八日づけのソ連『ブラウダ・ウクライナ』紙
- ⑯ 一九六三年十月二十日づけのソ連『イズベスチャ』紙と一九六四年第十二号の『イズベスチャ(日曜増刊)』
- ⑰ 一九六三年八月九日づけのソ連『コムソモリスカヤ・ブラウダ』紙
- ⑱ 一九六二年一月九日づけのソ連『ソビエツカヤ・キルギージャ』紙
- ⑲ 一九六二年六月二十六日づけのソ連『セリスカヤ・ジーズニ』紙
- ⑳ 一九六三年第三十五号のソ連『エコノミーチエスカヤ・ガゼータ』
- ㉑ 一九六三年八月十四日づけのソ連『セリスカヤ・ジーズニ』紙
- ㉒ 一九六二年一月十四日づけのソ連『ブラウダ』紙
- ㉓ 一九六一年二月六日づけのソ連『ブラウダ』紙
- ㉔ 一九六三年四月九日づけのソ連『イズベスチャ』紙
- ㉕ 一九六〇年十月九日づけのソ連『ソビエツカヤ・ロシア』紙
- ㉖ 一九六〇年十月十八日づけのソ連『イズベスチャ』紙

- ⑳ 一九六三年七月十七日づけのソ連『セリスカヤ・ジーズニ』紙
- ㉑ 一九六三年第二十七号のソ連『エコノミーチエスカヤ・ガゼータ』
- ㉒ 一九六三年七月二十七日および八月十七日づけのソ連『リテラトルナヤ・ガゼータ』
- ㉓ 一九六一年一月二十七日づけのソ連『ソビエツカヤ・ロシア』紙
- ㉔ 『小冊子『食糧税について』のプラン』、『レーニン全集』第三二巻
- ㉕ 一九六三年八月二十八日、フルシチョフがユーゴスラビアのプリオニ島で外国の記者とのインタビュー
- ㉖ 『ナロードニキ主義の経済学的内容とストルーヴェ氏の著書におけるその批判(ブルジョア文献におけるマルクス主義の反映)』、『レーニン全集』第一巻
- ㉗ 一九六一年八月十八日づけのソ連『ブラウダ』紙編集部の論文『共産主義建設の綱領』
- ㉘ 『自決にかんする討論の総括』、『レーニン全集』第二二巻
- ㉙ 『国家と革命』、『レーニン全集』第二五巻
- ㉚ 同右
- ㉛ 同右
- ㉜ 一九六四年二月、ソ連共産党中央委員会でのスースロフの報告
- ㉝ 一九六四年第八号のソ連『パルチーナヤ・ジーズニ』誌編集部の論文『労働者階級の党から全ソ連人

民の党へ」

- ④1 一九六一年十月、ソ連共産党第二十二回大会でのフルシチョフの「ソ連共産党綱領について」の報告と「総括報告」
- ④2 「国家と革命」、『レーニン全集』第二五巻
- ④3 「プロレタリア革命と背教者カウツキー」、『レーニン全集』第二八巻
- ④4 レーニン「マルクス主義国家論」
- ④5 一九六四年三月十日づけのソ連『イズベスチヤ』紙
- ④6 マルクスとエンゲルス「オーガスト・ベーベル、ウイルヘルム・リーブクネヒト、ウイルヘルム・ブルッケ等への回状」
- ④7 一九六四年第八号のソ連『パルチーナヤ・ジーズニ』誌編集部論文「労働者階級の党から全ソ連人民の党へ」
- ④8 「なによりも明白さを！」、『レーニン全集』第二〇巻
- ④9 一九六二年十一月、ソ連共産党中央委員会総会でのフルシチョフの報告
- ⑤0 一九六二年第五十号のソ連『エコノミーチエスカヤ・ガゼータ』社説「研究、了解および行動」
- ⑤1 一九六三年第二号のソ連『コムニスト』誌の社説「共産党員と生産」
- ⑤2 一九六三年二月二十七日、モスクワのカリーニン選挙区における選挙民の大会でのフルシチョフの演

説

- ⑤3 「ふたたび労働組合について、現在の情勢について、トロツキーとブハーリンの誤りについて」、『レーニン全集』第三二巻
- ⑤4 「ウエ・ザスーリッチはどのようにして解党主義をほうむるか」、『レーニン全集』第一九巻
- ⑤5 一九六一年十月、ソ連共産党第二十二回大会でのフルシチョフの「ソ連共産党綱領について」の報告
- ⑤6 マルクス「ゴータ綱領批判」、『マルクス・エンゲルス選集』第二二巻上
- ⑤7 「国家と革命」、『レーニン全集』第二五巻
- ⑤8 一九六四年二月、ソ連共産党中央委員会総会でのスースロフの報告
- ⑤9 一九六三年七月十四日、ソ連の全党組織と全共産党員にあてたソ連共産党中央委員会の公開書簡
- ⑥0 一九六〇年七月七日、オーストリアでのフルシチョフのラジオ・テレビ演説
- ⑥1 一九五九年九月十六日、フルシチョフとアメリカ国会の指導者および上院外交委員会とのインタビュー
- ⑥2 一九六四年二月、ソ連共産党中央委員会総会でのフルシチョフの講演
- ⑥3 一九五九年九月二十四日、フルシチョフとアメリカの実業界および社会の知名士とのインタビュー
- ⑥4 一九六〇年三月二十五日、フルシチョフとフランスの議員とのインタビュー
- ⑥5 「帝国主義と社会主義の分裂」、『レーニン全集』第二三巻

- ⑥⑥ 一九六四年五月十日、イギリスBBCテレビ番組における記者の質問へのラスクの回答
- ⑥⑦ 一九六四年四月六日、イギリス東部ノーリッチでのヒュームの講演
- ⑥⑧ 一九五六年五月十五日、記者会見でのダレスの談話
- ⑥⑨ 「偉大な創意」、『レーニン全集』第二九卷

⑦⑩ 毛沢東一九六三年五月九日、「幹部が労働に参加することについての浙江省の七つのよい資料」にあ
たえる評語

フルシチョフのエセ共産主義とその世界史的教訓
ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す(九)

1964年 初版発行

出版者 外 文 出 版 社

(北京阜成門外百万荘)

発行者 中 国 国 際 書 店

(北京 P. O. Box 399)

編号: (自) 3050-982

3-J-577P

00032

★ ソ連共産党指導部とわれわれとの

意見の相違の由来と発展

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す

★ スターリン問題について

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す(二)

★ ユーゴスラビアは社会主義国か

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す(三)

★ 新植民地主義の弁護士

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す(四)

★ 戦争と平和の問題での二つの路線

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す(五)

★ 根本的に対立している二つの平和共存政策

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す(六)

★ ソ連共産党指導部は

現代最大の分裂主義者である

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す(七)

★ プロレタリア革命とフルシチョフ修正主義

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す(八)

★ 中国共産党中央委員会と

ソ連共産党中央委員会の七つの往復書簡

★ ソ連共産党指導部がインドと連合して

中国に反対している真相

★ 全世界の人民は団結して核兵器を全面的

に、徹底的に、あますところなく、だん

こととして、禁止し、廃棄しよう

★ 哲学・社会科学工作者の戦闘的任務

